

# 成·寿

SEIJU

2020年

第49卷

春号



善光寺  
藏  
安

三益庵

善光寺  
藏  
安





横山善  
沙阿三  
存  
癸







引き続き、本寺光真寺住職黒田泰弘老師、開基家ナリス化粧品社長村岡義様、日野石材工業協同組合理事長臼井瑞穂様、善光寺護持会会長山口義男様にご挨拶賜りました。

最後に謝辞に立った博志方丈は全ての縁に感謝しつつ「五十年前、苦勞した父と母を檀信徒の皆様がお支え下さり、共に一日一日を積み重ね、こうして今を迎えることが出来ました。篤く篤く感謝申し上げます。先代は常に檀信徒皆様のご先祖様の菩提を願ひ、皆様の安寧を願って日々努めてきました。私もそれを心として、さらに五十年、精一杯精進して参ります」と誓いました。

また、式典の前後に、善光寺の歴史を紹介するDVDを放映。先代住職のお姿やお声に接することが出来ました。懐かしく思い起こすと共にこれからも寺檀一体に善光寺の理念『宗祖を通して釈尊へ還る』、先代様の心を継いでいく気持ちを新たに五十周年の記念式典が円成致しました。



第二部には北法相宗大本山、京都清水寺の森清  
範貫主による記念法話を頂戴致しました。

善光寺では平成十三年（二〇〇一年）に先住武  
志老師夫人倫子様が曹洞宗大本山總持寺ご開山瑩  
山禪師と清水寺の観音様との深い縁を顕彰した碑  
を清水寺境内に建立して以来親交を深めて参りま  
した。この度五十周年記念式典でのご法話も快く  
お引き受け下さり、ユーモアあふれる語り口にみ  
んな笑っているうちに心優しい気持ちになり、笑  
顔で頷きながら聞法致しました。

報恩供養の導師をお務め頂いた新美老師は祝辞  
で「先代住職は非常にアイデアに富んだ方だった  
が、凄かったのは実行力。自分の信じたことは絶  
対にやり通すという信念のもとに今日の基盤を築  
かれた。それを現在の住職が引き継ぎ、善光寺は  
益々立派になっている」と称えて下さいました。



成寿山善光寺では十一月二十八日に開創五十周年記念式典が営まれました。

昭和四十四年（一九六九年）に先代住職黒田武志老師が、ナリス化粧品初代社長村岡満義氏を開基とし、光真寺三十六世黒田白純老師をご開山として開創されて半世紀。活発な布教教化を通して多くの方とのご縁を結ぶ中、本式典には三百五十名を超える方々が参列。寺檀一体となつて寺門の興隆を願いました。

当日、第一部は「記念法要」として、東京福巖寺住職新美昌道老師を導師に迎え「報恩諷経」を執り行い、御開山様、先代方丈様に五十周年を迎えた報告と感謝報恩の誠を尽くしました。

つづいて現住職博志方丈の導師にて、檀信徒の皆様、ご縁の方々の「祈祷法要」を執り行いました。



■ 特集

# 善光寺開創五十周年記念式典

## 第一部 記念法要

報恩諷經 導師 福巖寺住職 新美昌道老師  
祈禱諷經 導師 当山住職

## 第二部 記念法話

清水寺貫主 森清範大僧正



カラ	―	■特集 開創五十周年記念式典……………	1
法	話	●開創五十周年記念法話 「仏とは命そのもの」……………	26
		清水寺貫主 森 清範	
		●住職法話 令和元年 施食法要「こころの耳を澄ませて」……………	56
		黒田 博志	
連	載	●『普勸坐禅儀』に学ぶ その十三……………	64
		安藤 嘉則	
法	話	●平成三十一年 春彼岸会 「仏教徒の心がけ」……………	72
		渡邊 清徳	
		●令和元年 秋彼岸会 「いのちのつながり」……………	84
		水庭 浩章	
カラ	―	■檀信徒供養塔 開山忌・第三十二回育英会辞令交付式 善光寺旅行会……………	99
アーカイブ	■NHK第一ラジオ放送「心の時代」(『成寿』第三十卷より)……………	114	
		黒田 武志	
		●ニュースアラカルト……………	138
		●善光寺霊園ニュース……………	154
お知らせ	●留学僧募集、毎月の催事……………	160	
	●普門寺アイゼンブツフ禅センターからのお便り……………	174	
育英会寄付	172	読者のたより	176
		編集後記	184

題字・イラスト 伊藤三喜庵

# 巻頭言

善光寺住職 黒田博志

平成から令和へと時代が変わった昨年、善光寺は開創五十年を迎えました。

これも開創以来、お寺をお支え下さった多くの檀信徒の皆様、お力添えを下さった多くのご縁の皆様のおかげと心より篤く篤く感謝申し上げます。

この慶事にあたり令和元年十一月二十八日、記念式典を無事に執り行うことが出来ました。

当日は東京福厳寺御住職新美昌道老師にご導師をお務め頂き「報恩供養」を厳修してくださいました。

次いで檀信徒皆様方の諸縁吉祥を祈念してのご祈祷。

師父が若かりし頃より縁を結ばれ、善光寺五十年の歩みをお護り続けて頂いた  
お不動様に、これからも変わらぬお護り頂けるよう「任職として心を込め務め  
て参ります」と、気持ち新たに念じました。

法要後は、京都清水寺貫主森清範大僧正によるご法話を頂戴致しました。

平成十三年に清水の観音様と大本山總持寺開山瑩山禪師様との縁を顕彰する碑  
を清水寺境内に建立させて頂いてからのご縁です。

遠路はるばる横浜の一寺院に足をお運び下さったの記念法話。有難いご縁に感  
謝し、ご法話に感動致しました。

開基家ナリス化粧品社長村岡弘義様にも大阪からお越し頂き祝辞を賜りまし  
た。

師父と開基様との運命的な縁。その縁が花開き五十年後の今日を迎えることが出来ました。永年にわたりご芳情を賜っておりますこと本当に有難うございます。

地元を代表して日野石材工業協同組合理事長白井瑞穂様からもお祝いと励ましのお言葉を頂戴致しました。有難うございます。

『有難う』とは文字通り「有ることが難しい」ことです。五十年間様々なが縁がつながり現在の善光寺がございます。何ひとつ欠けても現在の善光寺は有りません。

過去の全てを受け止めて感謝の想いで未来へとつなげていく事。

年が明け令和二年は子年です。子は十二支のはじめの年。新しい巡りの年に善

光寺も五十一年目を迎えました。

今年は師父の十七回忌の年となります。師父の築かれた寺檀和合の姿を護持し報恩感謝を旨として一歩ずつ地に足をつけて歩みます。

現在建設中の観音堂も秋ごろには完成の予定です。新しく観音様をお迎えし、ご縁を結ばせて頂きます。

これからも皆さまが笑顔でお参り頂けるお寺を目指し日々精進して参ります。

今後共御指導・御支援の程宜しくお願い申し上げます。

# 善光寺開創 五十周年 記念式典

## ■来賓御挨拶

東京都墨田区 福厳寺ご住職

### 新美昌道様



善光寺開創五十周年記念という事で盛大に式典が執り行われましたこと、まことにおめでとうございます。

五十年というのは口で言うのは簡単ですが、大変な年月でございます。先代ご住職様は、非常にアイデアに富んだ方で、加えて素晴らしい実行力をお持ちの方でした。とにかく自分が信

じたことは絶対にやる、やり通すという信念のもと、今日の善光寺を築かれました。

現住職様もその後を継がれて、ますます立派になられてゆき、観音堂も新たに造られ、素晴らしい善光寺が出来上がってきています。この皆様方のお力添えが非常に大事でございます。

私は先代方丈様とは大学一年の時からお世話になっていきます。六十五年以上ということになります。さきほど掛けさせていただいたお袈裟は先代方丈様の形見として頂戴したものです。

どうぞ益々の善光寺様の発展と皆様方の御健勝を祈念して御祝いの言葉とさせていただきます。おめでとございました。

栃木県大田原市 光真寺ご住職

黒田泰弘様



栃木県から参りました本寺光真寺住職でございます。短めです。挨拶ということですので、一つだけお話をさせ

ていただきます。

先般、博志住職が光真寺にお見えになりました。御当山の開山であり、光真寺の先々代にあたる私の祖父に五十周年のご報告をする為、足を運んで来られたのです。式典の準備で忙しい時期であろうにも関わらず、わざわざ栃木まで来られるなんて、「これはたいしたことだ」と思いました。

皆様もよく法話で、「子や孫である私たちが

善くなるには、根っこであるご先祖様を大切にしましょう」と耳にするかと思えます。根本を大切にするということが、これは真理だと思えます。ですから住職自ら本寺を大切に、善行を實踐されておられる博志住職さんは素晴らしいなと感心しておりました。

しかし、先ほどの森下氏の御話を聞いて、私も考えがさらに深まりました。素晴らしい行いを「持つてきていただいた」と感心しているばかりではなく、善光寺様のご発展と檀信徒の皆様にご多幸あるように、私自身の行いを「持つて帰っていただく」ことが本寺として大切であることを学ばせていただいたのです。

これから私も心新たに、日ごろの精進を善光寺様や檀信徒の皆様に向けて参ることをお約束し、本寺の挨拶と代えさせていただきます。本日は誠におめでとうございました。

## 開基家

### 株式会社ナリス化粧品代表取締役社長

#### 村岡弘義様



大阪でナリス化粧品という会社を営んでおります。開基させていただきます。開基させていたいただいたのは私の祖父、ナリス化粧品の創

業者であります。

今から五十有余年前、武志方丈様と總持寺の参禅会で出会いがありました。おそらくは親子ほど年が違っていたと思いますが、人生の中で袖触れ合い、非常に認め合いということがあったのであると思います。高度成長期の時代です。私どもの本業は化粧品でしたが、人々がどうやって生きるかを一生懸命に探し勉強して

いく中で武志方丈様と出会い、我々の会社の従業員教育にぜひ坐禅を取り入れたいという祖父の願いを聞き入れて下さり、武志方丈様は幾度となく大阪に足を運び我々の会社で坐禅を行い、ご教授頂いた。そのようなことがご縁であったと聞いております。

当時の社員は皆、教えの凄みと鋭い警策の痛みを口にしておりました。終わった後は、私の家で、私のおばあちゃんと母と私も含めて父も一緒になってご飯を食べ、温かい時間を過ごさせていたいただいたのが良き思い出です。私が小学生の頃だったと思いますがよく覚えております。それがご縁で、ちょうど五十年前、昭和四十四年この地に成寿山善光寺が開創されました。

今日こうして皆様を見渡させていただいても、やはり短い時間ではない。非常に沢山の檀家さんが増え、意義のあるものになっていることを非常に喜ばしく思っております。残念なが



ら平成十六年に武志方丈様はご遷化されましたが、その後は博志方丈様が立派に後を引き継がれ、ますます盛り上がっていることを感じてます。

来年には武志方丈様の念願であった観音堂もできるといふことで、非常に喜ばしく思っております。平素は大阪ということもあり、なかなかお目にかかることも少ないのですが、大阪からいつも思っております。

武志方丈様、そして博志方丈様からいつも村岡に、そしてナリス化粧品に感謝のお言葉を頂戴するのを非常にもったいなく思っております。我々の会社は八十八年になりますが、五十年、八十八年、ともに長く存在すること、社会の中で意味を持っていくことを願っていく次第でございますので、一緒に若き博志方丈様とやっしていきたいと思っております。

簡単ではございますが、あらためましておめ

でとうございます。



森清範貫主による揮毫(門柱)

## 日野石材工業協同組合理事長

### 臼井瑞穂様



開創五十周年

まことにおめでとうございませう。このような盛大な御祝いの席にお招きいただきありがとうございます。

でございます。本日慶びの節目を迎えられましたことは、ご住職を筆頭に総代役員・檀家・信者様の碎身のご努力の賜と心よりお慶び申し上げます。

私ども日野石材工業協同組合も数年前に五十周年を迎えました。私たちはお墓を建てることをなりわいとしていますが、基礎がとても大事です。基礎がしっかりしていれば多少の地震などの災害にも耐えられます。先代はその基礎を

しっかり築いてくれたと思っています。このご時世、墓じまい、宗教離れなど先の見えないことばかりですが、善光寺は基礎がしっかりしています。住職はまだ若いですがしっかりしています。この先二十年、三十年、五十年…さすがに私は五十年は無理でしょうが、共にまた御祝いの日を迎えられるようお祈りしています。私たちは応援しています。

むすびになりますが、只今建設中の観音堂の完成までの無事故、本日お集まりの皆様、善光寺様のますますの発展とご健勝、ご健康を祈念して祝辞とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

## ■檀信徒代表御挨拶

### 護持会会長 山口義男様



横浜善光寺の

開創五十周年にあたり、お足元のお悪い中大勢ご参加いただき、ありがとうございました。

また、清水寺の貫主様にもユーモアを交えたお話をいただき、いつもはテレビで背中しか見えないお方なのに、お顔を拝見しながら楽しいお話を聞けて、大変いい五十周年だったかと思っております。

さきほど、導師を勤めていただきました新美昌道老師も先代とはお寺をもつ前の学生時代からのお付き合いとのこと。私も先代とそれ

に近いお付き合いがございまして、若い頃より新美老師とも親しくさせて頂いておりました。今日、新美老師に導師をお勤めいただき先代も喜んでいると思います。

またナリス化粧品のご挨拶。社員教育の坐禅で叩きまくっていたというお話がありました。私の知る限りでは本当にその通りだったようです。

窓の外を見て下さい。丘の上の右端が先代方丈様のお墓なんですけど、今日の雨は嬉し涙でございまして。「五十年やってくれてありがとう」と涙を流してくれていると思います。その隣には檀家さんの皆様の供養塔。先に逝かれた方々もきつと安心して下さっていると思います。

これからも何とぞ善光寺をよろしくお願ひ申し上げます。本日は足元のお悪い中、先代方丈様の涙の中、ご出席いただきましてありがとうございます。

黒田 博志

皆様本日はご来場いただきまして誠にありがとうございました。

おかげ様で開創五十年を迎えることが出来ました。本当にご縁の皆様方のおかげでございます。

報恩供養のご導師をいただきました福厳寺方丈様ありがとうございます。先代とは学生時代からのご縁というお話です。昭和四十五年二月にはじめて善光寺で勤められたのが『節分会』です。節分会で皆さまにお渡ししている枡には「福」と「寿」という字が墨書されております。実は五十年間その字を書き続けて下さっているのが、こちらの福厳寺の方丈様なのです。改めてまして本当にありがとうございます。

報恩供養の後に皆様方の心願成就、御多幸を

祈念してのご祈祷を勤めさせていただきます。その際、最初に仏様に対して言葉を述べさせていただきますが、その漢詩は本日ご随喜頂いております小田原の成願寺方丈様より頂戴したものであります。ふた月ほど前に方丈様と奥様が善光寺に——こちらをお祝いとして先代様にお供えさせていただきます——とお持ち下さった漢詩でございます。それをこの式典で仏様に報告させていただきます。成願寺方丈様誠にありがとうございます。

ご法話をいただきました清水寺様とのご縁は、平成十三年に清水寺様の境内地に高さ二メートル半、幅三メートルの顕彰碑を建立させていただきました。これは總持寺の瑩山禪師様と京都清水寺様とのご縁の深さを顕彰する碑です。清水寺様は七百七十八年創建で、約千三百年。善光寺は昭和四十四年で五十年。比較する



## 仏とは命そのもの

京都音羽山清水寺貫主 森 清 範

ご紹介いただきました京都の清水寺の住職でございます。

(住職) 今、善光寺観音堂を建立中です。その正面に額を上げますが、「観音堂」と書いてございます。その御書を森清範大僧正にご揮毫いただきました。

あわせて、平成二十八年師走に建立した当山の大きな石碑の門柱もご揮毫いただきましたことをご紹介しますいただきます。

このたびご当山が開創されて五十年というおめでたい時にご案内いただきまして、誠にありがとうございました。平成十三年に私どもの境内の南苑に瑩山禅師様と清水の観音様の深いえにしを報恩顕彰する立派な碑をこちらのご住職ならびに奥様のご縁で建立されています。そんなご縁を頂戴しまして、今日ここにご案内いただいた訳でございます。

瑩山禅師様はご存じの通り曹洞宗道元禅師様



から四代目の祖師様に当たられるわけですが、この瑩山禪師様と清水寺の観音様の縁というのは、そのお母さん、おばあさんと三代にわたるたいへん深いご縁であったのでございます。それだけではありません。瑩山禪師が總持寺を能登半島にお開きになられるについて、そこにはもともと諸嶽観音堂というお寺があったそうです。碑の表に駒沢女子大学の東隆眞先生が銘文を書いてらっしゃいますが、この観音堂においてにられた瑩山禪師様が、そのお堂をご覧になって、「門に入って諸堂を見渡せば、清水寺の如くに壮観であり、ここは仏法の縁が熟した靈地である」という瑞夢を感じたと記しておられます。そのことで私が今日ここに寄せていただくご縁を頂戴したことでございます。

みなさん、清水寺にはいつぺんくらいは来ていただいていますね？ 修学旅行で来ていただきたい

てる？

私の清水寺は朝六時から門が開いておりますので、修学旅行の学生さんはもう六時から団体でお参りになります。団体でない場合は三人四人のグループで市バスで回ったり、タクシーを一日、半日チャーターして回ったりする修学旅行の学生さんが沢山今の時期お参りでございます。

みなさんも修学旅行で「清水寺行ったなあ。あそこに舞台があつたなあ。あの下に音羽の滝があつて……」大体それくらい覚えていてほしい。ですけど、清水寺が何宗やとか、何が祀つてあるか、そんなことはご存じないでしょう。

清水寺は七七八年、今から一千二百年余り昔に創建されております。京都市内には大体千五百軒くらいの大小の寺がございますけど、その中でも古い歴史のある寺でございます。この千

二百年余りの間に十回余りの火事に遭つています。十回もあるんですね。「なんでそんなにやう火事いつてんのや」と言われるんですけど、それは雷が落ちたり、中から火を出したり、よそからの火事で火が移つてきたり、いろいろ理由がありますけれども、中に「兵火」というものもあります。僧兵に焼かれてるんです。

私とこの東山三十六峰の北の方に比叡山がございます。私とこは奈良の興福寺の末寺でございます。比叡山より少し時代が古いんです。ご存じのように、南都北嶺と言ひまして、南都は興福寺を、北嶺は比叡山延暦寺を意味しまして、南都北嶺の僧兵がよく喧嘩をしました。そんな一時期があるんです。北嶺比叡山から奈良へ行くまでに、末寺の清水焼いてしまえ！ということで、ちよいちよい焼かれておるわけです。今は仲良うしてます。焼いたなんてもう八百年も前の話です。



そんなことで十回も、大火災に遭うてきておられますが、すぐに立ち直つてきてるんです。これも昔から大衆・庶民の信仰の寺として、多くの方々の信仰を集めていたのです。昔で言うなら「遊山的」、今で言うなら観光的というか、「桜が咲いてるで、ほないっぺん清水さんへ桜見に行こか」、「紅葉きれいやで、いっぺん行こか」という気軽な気持ちで来ていただいているのが清水寺です。今も昔も変わりまへん。

そやから『源氏物語』にも『枕草子』にも出て来ます。『源氏物語』の作者は紫式部でしょ、『枕草子』は清少納言。当時、一条天皇には彰子中宮と定子皇后という二人の奥さんがおられました。彰子中宮の女官が紫式部、定子皇后の女官が清少納言さん。そやさかいに二人はあの狭い御所の中で睨みおうたはった。ちよつと調べて来たんですけど、当時の日記を読んでもしたらこんな風に書いてある。これは紫式部が言

つてるんですけど。

「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。…よく見れば、まだいと足らぬこと多かり」

きつい言葉ですなあ。「清少納言は得意気に偉そうな顔してるけど、まだまだ未熟や！」と紫式部が言ってるんです。きつい言葉でございます。これは男の人にはなかなか言えまへん。『枕草子』は、みなさんご存じでしょ？一番最初を読んでみますとね。

「春はあけぼの やうやう白くなりゆく山  
際 すこしあかりて 紫だちたる雲の細く  
たなびきたる」

有名な文ですな。御所から東の東山を見てはるんですけど、ここには別に清水さんとは書いてないんですけど、私はこの文を読んだときに、

あつ！清水さんを見てはるんやと思て、隣の知恩院さんの和尚さんにそう言うたら「いや、違う違う。あれはうちの華頂山のことや」と。華頂山知恩院さんと清水さんは隣合わせなんです。これを我田引水と言うんですけど。

『枕草子』を見ますと、お籠もりに行ったとか、お参りに行ったとか十回くらい出てくるんです。『枕草子』というのはご存じのように随筆。そんなに難しい内容は書いてないんです。自分の思ひ出なんか書いてはりますので気軽に書いてはります。ようお寺へお参りに行っておられます、お説教を聞いてはるんですね。第三十一段を見ますと、

「説教の講師は……」と書いてあります。それは我々のような者です。説教をする和尚さんはどんな和尚さんがいいのかという事が書いてある。ちよつと読んでみます。

「説教の講師は顔よき」……男前がええ言うてはるんです。今の言葉でいうたら、説教の講師はイケメンがよろしいと。やっぱり女の方ですなえ。

その男前の講師の顔を「つとまもらへたるこそ」……じつと見とれて聞いていると、

「その説くことの尊さも覚ゆれ。」……説いてはるところの尊さも男前やったらよく分かるよな気がすると。

その次が面白いんです。

「ひが目しつれば」……よそ見をするということ。つまり、男前でない和尚の顔を見ながら話を聞いていると、よそ見をしてしまう。すると……

「ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らむと覚ゆ。このことは、とどむべし。少し年などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは、かき出でけめ。今は罪いと恐ろし。」と書いて

ある。

「よそ見して、すぐ忘れるので仏罰が当たる。私も年ゆえあの世が近いさかいに、和尚さんが男前や男前でないでなことを言うてバチが当たつたらかなんさかいに書かんとこと」と言っていて、これ書いて残してはるんです。

みなさんも、もうしばらくでございませうので、他のことを考えんようにしておくれやっしや。

ここから見てたらよう見えます。学校の先生が教壇に立ってはるようなもんでね。よく私が地方へ招かれて行きます。ちよつと理屈ばい話しだすとね、もうお体はここにありますが、お心はもはや履き物はいてはる。もつと早い人は家へ帰ってはる。夜になつて「今日は何やつたかいな？」てなことになる。しばらくのことですのでここへちよつと身も心も置いといていただきたいということでございます。

そんなことで、私のところは平安時代からいろいろな方がお参りしたようでございます。

今も「日参」いうて、毎朝お参りに来はる人が百五十人くらい入つてこられます。「月参り」というて必ず月にいっぺん、それから京都駅を通過する時には必ず新幹線から降りてお参りしてから行くという方もおられます。或いは「西国三十三観音霊場」でございませうので、観音様参りもあります。京都に行つたら京都見物で清水さんも行こかということでも来られる方もずいぶんとございます。いろいろな方が来られます。今もそうなんです。いろんな方がおられます。私、昨日京都を出てきたんですけど、出しな、うちの執事長さんが「明日は善光寺さんですね」と。

「そうです。善光寺さんの五十年で行つてきませう」と言うたら、

「ほな貴主、あの話しておいておくれやっしや」

「あの話でなんですもんねん？」

「あの話ですがな！」

……ということですので、貴重な時間でございますが、あの話をちよつとだけします。し  
といてくれと言われたもんですから。

もうこれは時効でございまして三十年近く前  
の話です。京都の隣、滋賀県から秋の夕方に老  
夫婦が来られたんです。私の先輩の和尚さんと、  
もう亡くなつたんですが、その老僧が相手しは  
つたんです。老僧にどう言わはつたかという  
と「明日、一億円清水さんへ寄付する」と。

一億円でっせ！　あまり皆びっくりしはり  
しませんあ。さすが善光寺さん！　大概この  
話したら、ひっくり返る人がひとりやふたりい  
てるんですけどね。

「一億円!?」。老僧がびっくりしはつて「ちよ  
つと待つておくれやっしや」て走つて寺務長の

とこへ行きました。

寺務長は在家の方で和尚さんではない人です。  
「今、来てはる老夫婦が明日一億円ここへ寄付  
する言うてはるんやけど、ど、どないしまし  
よ？」と言うて慌てる。

うちの寺務長は偉いですね。「和尚さん、慌  
てたらあきまへん。あげようと言われてますん  
やろ。もらいまひよ」……ふたつ返事で一億円  
もらうことになった。

うちにこんな大きな金庫があります。大きな  
声では言えまへんけどね。中にいっぱい詰まっ  
てる金庫でっせ。それを無理無理に札束をのけ  
て……私この時初めて知つたんですが、一億円  
言うたら、一メートルになるんだそうですね。  
……まっさらのお札で一メートルになる。一メ  
ートル分だけ空間を作つて、持つて来はつたら  
ここに入れよう。

それから「できるだけのサービスしいや」と



寺務長が言いました。その当時はうちの門前にお寿司屋さんが二軒あったんです。今はもうなくなりましたけど。急に来はったんですが、そこからお寿司とつて、熱いおつゆも付けて、サービスしました。

苦勞話を聞いて、老僧が涙ながらに、「で、そのお金はどこから来ましてん？」と尋ねたら

……

土地が道路かなんかでいっぺんに売れた。そうしたら一億円余りのお金が入って、いところが来て、はとこが来て、何や分からののが来て、ちよつとずつ持つて行かれる。これではご先祖に申し訳ない。それで、おじいさんおばあさん夫婦が、いつも手を合せている清水の観音さんにこの一億円もろて貰おうと思て決めて来たんですと。

「えらいこつちやなあ。今、一億円どこにありますか？」て聞いたたら「お仏壇の下に隠してあ

る」と。あるところにはある。

それで、できるだけのサービスをしました。さて、その老夫婦が帰りしなに、「和尚さん、慌てて出てきまして、帰りの電車賃千五百円忘れてきた」と。老僧が自分の財布から千五百円出して渡しました。「ほな明日十時に一億千五百円持ってきます」「わかりました」……

大体この話の結論が分かったと思います。翌日一時間待っても、十年経っても、二十年経っても、まだ来はらしません。執事長が言うといってくれと言いましたのは、実は金庫にまだその時にあけた空間が残っています。「俺が埋めたるう！」という人が出るかもわからん。

まあいろんな方が来られます。その話してたら時間がなくなるので次にいかせてもらいます。清水の舞台、飛んだつもりと言いますね。飛んだらあきまへんで。飛ぶつもりで結構でございます。その舞台で、年末、十二月の十二日に

漢字一字を書いております。

去年は「災」という漢字でした。「災」の上の部分は「セン」と発音する。ほんまはね、一本横の線があるんです。今はこれがないんです。これは川を意味するんです。横の線は堤防なんですね。ところが、川の水が氾濫すると、水害になる。足りないと火災になる。去年は自然災害が多うございましたので「災」という字になったんです。

その前はどんな字だったかと言うと「北」でした。この北という字を書いてます時にふっと思い出したのは、私達は仏さんや神さんの前に行ったら手を合わせますね。手を合わせというのは神様仏様に最高の礼を捧げますという意味なんです。この手を広げると手の平が横に並びます。もひとつ広げると手の甲が背中合わせになります。そして指をちよつと曲げるとどうですか？ 北という字になりますね。

北という字はそういう字かいなと思いましたが。その北にニクヅキを入れると背中の中背なんです。背くということですよ。人は背いてたらあかんと、孔子さんが人は仁やと説きました。何がなんでも仁やと。仁という字は人が二人と書きます。「仁・義・礼・智・信」。孔子先生は何が何でも仁やと。二人が心を通わせて、心豊かに思いやるのが仁、これが始まりやおっしゃってるんです。

それにはやはり言葉をかけあうということなんです。黙っててもわかるやないか、それではあかんです。やはり言葉を掛けあうのが大事なんです。「おはようございます」「行ってまいります」「お帰りなさい」「いただきます」「御馳走様でした」と、言葉を掛けなあかんです。言葉には「言霊」というて、魂があるんです。ですから言葉を掛けて下さい。皆さま方、今日ここに沢山お集まりですが、帰られたら、まず

ご主人は奥さんに言葉を掛けて下さい。「お母さん、わしがこんな元気なんはお母さん、あなたのお陰や、おおきに」と。ご主人よろしおすか？ 挨拶して下さい。お母さんびっくりしますますやろなあ。

「お父さん、今日どこ行ってきはりましたん？」  
「いやいや、善光寺さんや」

「善光寺さんてええとこやなあ。何遍でも行きなはれ」

奥さんも帰られたら「お父さん、うちがこんなに元気でいられるのはお父さんのお陰、おおきに」と言うてください。

「久しぶりやなあ、そんな言葉聞くの。今日お昼何食べてきはったん？」と言わはるかかわかりませんけど。声を掛けるということ、この声に力がある。皆さんがた坐ってはって立つときどうします？ 「ヨッコラシヨ！」と言うてしよ？ あの声で立てますねんで。「ヨッコラシ

「ヨー」と言わなんだらストーンとひっくり返ります。だんだん私みたいな年とってくると、スツと立ったらあかんです。「待てよ、待てよ……ヨッコラシヨー」でないと立てしまへん。

昨日私が京都駅から新幹線で来ましたときに、出発するときには駅員さんが「出発ヨシ！」と言っていました。あの声で駅員さんは次の駅に無事に着くように、「出発ヨシ」と言って祈ってはんのやなあとつくづく思いました。言葉というのは言葉という力があります。

その代わりに、人を傷つけることもあるんです。言葉の刃とも言われるくらい、言葉ひとつで相手に傷をつけることもありますので、いい言葉を発する、いい言葉を掛けていただくということですね。

万葉集の中に「言霊の幸わう国である」とあるんです。この国は言葉の霊力が幸せを呼ぶ国であると言うところがございます。言葉と

いうのは人間しか話さないんですよ。人間と一番近い動物はチンパンジーだそうです。チンパンジーと人間の体の造りは99.9%まで、ほとんど一緒ですわ。六百万年昔は同じように山の中に住んで、人間は野に出て来て、二足歩行をし、火を使い、道具を使うようになって、人の運命というものを作ったと言われていますが、決定的なことは話をするということだそうです。

言葉を使う、これが決定的な違いだということとです。彼らチンパンジーにも合図はあるでしょう。でも心の細やかなこと、それを表す言葉を使うのは人間だけやと。いい言葉を発することが大切ですね。言葉には力がある。

私のとこに明治時代から伝わっている話がございます。

税所敦子さんという女性の信心家がおられて、若い頃から歌を勉強されていました。お若くし



て、京都に勤めていた島津藩の武士の税所篤之さんと一方と結婚なさいます。篤之さんが早くに亡くなったため、敦子さんは鹿兎島へ行つて、篤之さんのお母さんの孝養につとめたんです。ところがそのお母さんは武士の育ちですから大変厳しい方で、敦子さんは針のむしろの上にいるような毎日やったそうです。

あるとき、お母さんが「あなたは京都で歌を勉強してきたそうですね。ここに私が下の句を作りましたので上の句を作ってください」と短冊を出された。その短冊を見ると

「鬼婆なりと人は言うなり」

と書いてある。また、おかあさん、私をいじめはる……と思つたんですが、さすが税所敦子さんは信心家ですね。「わかりました」と言うて作られた上の句が

「仏にも似たる心と知らずして」。

仏にも似たる心と知らずして

鬼婆なりと人は言うなり

という歌になった。この歌を聞いておかあさん、ハーツと気付かれた。そしてそれから「敦子さん、敦子さん」と言つて可愛がられて、最後は敦子さんの膝の上で亡くなられたと伝わっているんです。敦子さんは観音さんを拝んでいる絵馬を私とこへ奉納されました。明治天皇の皇后さんの内侍にまでなられた方です。

言葉ひとことで人は変わるんですね。だから、いい言葉を発しましょう。

ある時、小田原に用事がありました、京都から新幹線ひかりで静岡まで行つて、そこでまだまに乗り換えしました。小田原は三つ四つ先ですね。静岡でこだまに乗り換えようと待つたら、女性がキャリーバッグを引いて私の横に座られるんです。沢山座るところあるのにわざわざ私の

横へ来て、チャツとかばん開けて本を出して、「地獄はどうの極楽がどうの」と私に説明しはるんです。「困ったなあ」と思いました。私はそういう目に遭うのは初めてではないんです。何回かあるんです。駅なんか行きますとあるんです。それでどうなるかと言うと、最後は「あなたの宗教だめでしょう。私の宗教よるしいでしょう」という結論になります。

私はその時も「そうですか。そうですか」と返事してたんです。そしたらこだまが来て「すいません、私はこのこだまに乗って小田原に行きますさかい。また、お目にかかりまひよ」と言うて立ち上がったたら、「いえ、私もこのこだまに乗ります」と。つきあいのええ人ですなあ。そのままこだまに乗ったんです。そしたら、乗ったこだまのデッキでその女性がまた本を出して私に「地獄はどうの……」と説明してくれはるんです。「ハア、そうですか、そうですか」

と返事してたんです。そしたら、その方が急に泣き出さしたんです。ウワーツと絶句して、涙は出るわ、鼻水は出るわ。見てたら汚い話ですけどね。興奮して泣いてはるんです。私の手を握りながら泣かはるんです。格好悪うおしたで。デッキですから人が通らはります。その通る人が必ず私を見て行かはります。睨んで行かはります。「あの和尚、女性を泣かしてるな」てなもんで。私が泣かしてるのと違う。この人が勝手に泣いてはるんや。それは向こうには伝わらしません。

「どないしはりましたんや？」と私が言うたら、絞り出すような声で

「……娘が死にました。交通事故で一瞬で死にました」

「はあ、それでかいな、地獄や極楽言うてはったんは」

「和尚さん、あの娘は一体どこに行ったんです

か？ どこ行つたんですか！ 今こんなお骨になつてます。どこ行つたんですか？」

それで地獄極楽の話かと。その泣いているお母さんの顔を見てたら、こつちまで悲しみ、苦しみに包まれていくようでした。「そらお母さん大変ですなあ」と言うてたんです。「娘はどこ行つたんですかあ？」て泣いてはる。私ね、思わずその時に「お嬢さんはよそに行つてはらしません。どこにも行つてはらしません。お嬢さんはお母さん、あなたのお心に帰つてはります」と言うたその時に、お母さんの泣いてるその顔が、納得したようなホツとしたような顔になつたんです。

言葉というのとは大切やなあと思ひました。「今からなんぼ考えても、どないしても生き返つてくるわけやない。苦しい。苦しいけども、この苦しみをどうしても越えて行かなあかん。そのしんどい時に、念仏をあげましょう。お経をあ

げましょう。がんばらなあきまへんなあ」て言つてる間に、三島に着きました。その方は三島で下車しはるのです。あ、もうこれでお別れやなど思つて、小田原へ持つて行く本（自著）をそのお母さんが下車される時に「しんどい時にこれを読んでください」て一冊を差し上げたたら、「おおきに」言うて降りはつた。降りはつたのはいいですけど、その新幹線ね、三分間停車しますねん。……長いですわ三分間て……。なかなか戸が閉まらしません。即席ラーメンができる時間ですわ。

それでそのお母さんが気の毒がつて「どうぞ席に行つてください」て言われたんで、席に行つてふと見たらガラスの向こうに立つてはるんです。座るわけにもいきません。そのうちピリリリりて鳴りまして、ドアが閉まつてスーッと動き出したんです。

「また、お目にかかりましたよな。サヨナラー」



て、久しぶりに女性に手を振りました。昔はよう振ったもんです。そんなことはないんですけど。サヨナラして別れて行ったんです。

沼津に異業種交流会というのが三十年ほど前に出来て、私は名誉会長として年に四回会合がありましてスピーチに行きます。異業種ですから坊さんもおれば学校の先生もお医者さんもおられます。食事するだけの会なんです。そこで日蓮宗の和尚さんが私に、

「あんた、ふた月ほどまえに新幹線の中でこんな事ありましたやろ」て話しかけてきました。私は忘れかけてたんですけど、

「おおーそうでしたな。ありましたわ」

「あのお方の娘さんのお骨にお経あげたの私ですもん」て言われたんです。

あのお母さんはお寺と縁がなくて、娘さんが亡くなってすぐに火葬場に行ったので、お葬式をしてない。一回で良いから和尚さんにお経を

あげてほしいというのが自分の願いやと言うて  
あちこち行かれたけど、あげてくれはるお寺が  
なかった。それでその和尚さんのお寺に行かれ  
て「私があげさせていただきましよう」と、懇ろ  
にお経をあげさせていただきました」という話  
です。

「ハア。ご縁やなあ」と。

「せやけど、なんであれが私て分かりました？」  
て聞いたら、

「あんた本あげはりましたやろ」

「ああ！あげた、本あげた！」本から足がつい  
たんです。

あの時、お母さんホツとしはったと思います。  
お母さん充分に知ってはったと思う。娘は私の  
心に帰ってるんやていうのを知ってはった。そ  
の事を一言でいいから和尚から聞きたかったん  
やと思います。私こんな格好してますから和尚  
て分かります。それがちょうど静岡駅のホーム

に座ってた。知ってはったところに聞いてホツ  
としてはったんやと思います。言葉というのは力  
があるもんやなああと、つくづく感心したんです。

皆さんご存じのように、戦争で日本は多くの  
方が亡くなりました。それでも「日本はまだま  
だ本土決戦しよう」と言うてた時があるんです。  
連合国軍はどうするか。日本分割論というのが  
出てたんです。東北と北海道はソ連がとる、関  
東から近畿まではアメリカ、四国は中国がとる。  
九州と中国地方はイギリスがとる。東京は四カ  
国が共同で占領する、という予定が立っていた  
ようです。結果としてはアメリカ一国が統治と  
なった訳です。

昭和二十六年に日本と連合国の間で「サンフ  
ランシスコ講和会議」というのがございました。  
世界の首脳が集まったのですが、そこで当時の  
セイロン、今のスリランカの大蔵大臣で、後に

大統領になられたJ・R・ジャヤワルダナという方が演説された。

「憎しみは憎しみによって止むことはなく、愛によって止む」と。

実はこれはお釈迦様の言葉なんです。ダンマパダ（『法句経』）と言って、お釈迦様の言葉に最も近いお経と言われているのにもとづいているんです。

ジャヤワルダナさんはお釈迦様の言葉を引用されて演説し、世界の首脳陣を大変感動させたということでございます。当時日本を代表して出ている吉田茂さんが眼鏡をとって涙を拭か合ったというくらい感動されたんですね。そして、その時セイロンは将来の日本のためにということで賠償請求を放棄してらんです。

そしてまた、GHQというのがございましたね。連合国最高司令官総司令部です。このGHQというのが日本の教育から芸能からあらゆる

所に目を光らせて、日本が再び戦争をしようと思っけないか、暴動を起こそうとしていないかということ監視しました。

その中で、日本が民主化されないのは何故かと考えた。それは日本人にはあの難しい漢字を読めない無学文盲の人間が沢山いるから民主化されないんだらうという仮説が出て、GHQが柴田武という言語学者の偉い先生に調べさせた。そんなん調べんでも日本人はほとんどの人が「読み書きそろばん」は最低限ちゃんと出来てたんです。

江戸時代は寺子屋、武士は藩校があつてそこに行つて勉強してました。ところが漢字が難しいから日本語をローマ字にしようという計画があつたんです。この時だけやのうて、もっと昔にもローマ字化計画があつたんですけど、戦後の時もまたつぶれてます。

日本語がローマ字になつてたらどうします？

大変です。私の名字「森」です。森はローマ字で *mori* です。私は木みつつの森ですけど、「盛」も *Mori* でしょ、杜、守、銆……沢山 *Mori* という字があります。ローマ字だけやったらどの字をいうてんのか分からしません。

その当時、盛んにローマ字化計画というのは言われてたんですけど、これはエピソードですから、ここへ置いて帰ってください。帰って帰って言うたらあきませんよ。これは作り話やと思いますよ。

戦後の頃といいますと、非常に人気があったのは「君の名は」という菊田一夫さんのラジオドラマです。NHKのラジオ放送で女性の銭湯が空になるほどの人気やった。すごかったんですよ。私はまだ小さかったんで、母親に聞いた話ですけど。

その番組がすぐに映画化されてます。映画では後宮春樹さんは佐田啓二さんですわ。中井貴

一さんのお父さんです。氏家真知子さんは岸恵子さん、綺麗な方ですね。

このNHKのラジオドラマが始まる時です。「次に何を放送するんや?」とGHQからNHKに電話が入った。高圧的に言うたんでしょうな。「次の放送はなんていうんや?!」と。聞かされたNHKの人が、失礼な、名前くらい言うたらええのに、と「名前はなんじゃー!」というのを英語で言わはったんです。「What is your name?」「ああ、そうか、君の名は、やな」。それでタイトルが「君の名は」になってしもたと。という話は嘘だと思えますので、ここに置いておいてください。

言葉って面白いもんです、言葉には力がある。白川静先生という漢字の大学者がおられたんですよ。京都の立命館大学におられた立派な方で、この方が「呪能」ということをおっしゃってる。

能というのは力のこと。呪は呪文の呪ですけど、まじないという意味ではなく、神に祈る言葉を入れた箱を捧げる人のこと。つまり祈りのことばという意味。ですから言葉には力がある。その言葉の力をひとつの器に入れたもの。それが何やというたら、「漢字」やと白川先生はおっしゃってる。言霊とって言葉に力があると言うのなら、「文字霊」というて文字にも力があるだろう。

昔はね、皆さん覚えておられますか？ 本や新聞は下に置いたらあかんとよう言いました。必ず机の上や棚の上の高い所へあげるようにと。そうでないとまたいだり、踏んだりしますさかいに。それはやはり文字霊があることを意味しているんじゃないかと私は思ってます。

漢字というのは三千年の昔、中国の殷時代から今日までずっと同じ文字を使ってるんです。世界にはメソポタミアの文字もエジプトの古い

文字もありますけど中断してるんです。漢字は三千年の歴史があります。中国、日本、韓国、台湾、昔はベトナムまで漢字文化圏でした。現在も十五億人が漢字を使ってるということなんです。

この漢字というのは文化を運ぶ、文化を育てる力がございます。漢字文化を発展させるという事は日本文化を発展させるひとつの力だろうなど、こう思って毎年、年末の一字を書きます。日本漢字能力検定協会というところが日本、あるいは海外から一年を象徴する漢字を募集して、その年の一字ということで清水で書いてるんですけど、私が書いてることはあんまりご存じないでしょ？ 知ったはりますか？

この前ね、北海道の紋別へ行きました、お寺で話をして、そこへ小さな小学生の男の子が来て「おっちゃん僕、今年の漢字で知ってる」と言うんです。「おお！知ってるか」「テレビで見



てるし、よう知ってる」と言うんです。「おっちゃんを書いてるねんけどな」と言うたら「知らんなあ」と。……水くさい男の子やな。なんでかなと思つたら、書いてる時はテレビカメラが私の後ろから撮ってるんですわ。見てください。たいがい私の後頭部だけ映るんですわ。そうでないと字が映らへん。この前もNHKに行きましてね、「たまには顔撮つたらどうですんねん」と言いましたら「顔いりまへん。あんた向こうむいときなはれ。振り向いてもあきまへん」と言われました。

今年で二十五年、もう四半世紀になるんです。あれ難しおすねん。舞台上で書いたらすぐに寺務所に電話がかかってくるんです。「なんであんな字を書いたんや！」と怒ってはるんです。「私を選んだのと違う」と言うんですけど、えらい文句言われるんです。自分が決めてた字と違う字やったんですやろな。なんでやと文句を言う

てきはります。

書いてるのをテレビがずっと映してますさかいに筆順が分かるんです。「あの字は筆順が違う」と言うてきます。えらい怒つてきはるんですよ。行書と楷書とでは筆順が違います。それにも関わらず、私が行書で書いたら、「筆順が違う！」てかかってきます。

書いて一分のちくらしいに電話があります。「そんなとこはねてへん」とかね。漢字の書き取りテストやないんですから少々は堪忍していただきたい。

はじめの頃は、事前に漢字を教えてくださいましたんです。「書く時が発表ですけど、急に言われても困らはるやろし、教えといたげます」と。ですから私は先に教えてもろてたんです。「その代わり書く時が発表ですさかい、誰にも言うたらあきませんで絶対」と。

誰にも言うたらあかんで言われたら、ちよっ

と人に言うてみたいのが人情です。聞かれますと、知ってたらね、知ってて知らなくて、そんな水くさいこと言えまへん。それで今はもう教えてもらいません。今じぶん私は予想して手のひらに字を書いてるんです。当たるかどうか分かりませんけど。たいがい今年は当たるんやないかなと思って想像してるんですけどね。

一つだけあつた年があるんです。それはこんな字でした。「虎」。これはプロ野球の阪神タイガースが優勝した年。関西はトラ党ばかり。その年に私は九州博多へ行つたんです。タクシ一の運転手さんに、

「今年は何ちゆう字になりますか？」て聞かれます、

「そら虎やろ」

「なんでです？」

「阪神タイガースが優勝したから」と言うたら

「このへんは鷹でっせ！」て。

鷹という字を書いてみたら難しい。幸い虎になつたのですが、実際に書く時、はねるところは墨が飛んできますさかい、筆をとめたんです。そしたら抗議の手紙がきて「あなたはご存じですか。虎という字はここはねるんですよ」とちゃんと赤いペンで訂正してくれてはりました。ご親切ですね。

あの書く筆は、ええ筆なんですよ。あれは広島県の熊野で作つて頂いてるんです。筆の名所の熊野です。「牛耳筆」といいます。牛を放牧して雨が降りますと耳の中に水が入るんです。すると耳の病気になるんです。自然というものはすごいですね。牛の耳の毛は水を奥に送らないように、すうつと水を保つんですって。そういう性質があるんです。その耳の毛をちよつととつて真ん中に入れて筆を作るんです。そうしますとね、墨もちがよろしいんです。ひと筆の時に、みんな墨が出ていかないんです。また次



書くともた墨が出てくる。また書くともた出てくる。そういう墨もちがいい牛耳筆というのが昔からあるんです。その筆を使つて書いております。

漢字というのはいろいろな字が集まつて複合して出来ております。そして、いろいろな意味が漢字にはあります。消費税の「税」。「禾」はのぎへんです。のぎへんは「一年間の稔り」です。つくりは兌で「だ」と発音するんです。これは抜き取るという意味です。一年間の収穫から無理無理、抜き取つていかはる。これが税金になる。

これにニクヅキつけたらどうですか？「脱」脱衣場の脱。虫をつけたら「蛻せいで」これは抜け殻という字。ごんべんつけたら説明の「説」。りっしんべんつけたら、「悦び」になるでしょ。話をすると、苦しみがなくなつて悦びになる。こういうふうには漢字というのは成り立つてるん

です。

税金の「税」は無理無理に抜いていかはるといいましたが、これは主観的な見方と客観的な見方があります。主観的な見方は、せつかく収獲したものを無理無理抜き取っていかれる。客観的というなら、皆が少しずつ出しあつて社会の環境をよくしていく、そういうものが税金の税ということになるんです。皆が持ち寄つて社会の力になる、というので税というのを「ちから」と読ませるんです。

大石主税さんはこの字を書きますね。漢字の意味は複合的なんです。

私ね、京都の管長さん、和尚さん方と寄つて月にいっぺんずつ食事しながら情報交換しまひよということ、相国寺の管長さんとかいろんな方と五、六人で会をやつてゐるんです。会の名前がないんで、名前つけようとなつたんです。ええ名前もでてきたんです。無心会とか。でも、

なかなか決まらない時に、「私らお寺にいるんやさかいに、寺という字を分けたら、土と寸ちがうか。土寸会どすんかいにしまひよか」となりました。

寺という字は面白い字ですね。いろんな字になるんですね。ぎょうにんべん書いたら「待つ」でしょ。今度お寺で待つてますさかいいうことで。日を書いたら時間の「時」でしょ。これはお寺で鐘や太鼓を叩いて時間を知らさはつたんですね。牛へん書いたら特別な「特」になるんですわ。牛というの特別な動物やつたんですね。竹かんむりをつけると「等しい」。ごんべん書いたら「詩」。山書いたら「峙そびつ」。りっしんべん書いたら「恃たのむ」。この「寺」にやまいだれをつけると「痔」。……私も手術してますねん。てへんつけると「持」。どうしてこうなつたんか考えたら……「お寺に来る時は持つてきなさい」と、漢字が言うてる。決して私が言うてるんやないですよ。しかもドスン（土寸）

と言うくらいに。こう言うとなんかお寺はあつかましいなとなるんですが、「お寺に来たら持つて帰りなさい」となると話は違つてきますね。持つて帰るて、そこらに置いてあるもん持つて帰つたらあきまへんで。何を持つて帰るかというと、仏法、仏さんの教え、ということでしょうね。

仏つてなかなか難しいんです。仏教には奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教といろいろあります。説明がみな違う。違うからこそ宗旨宗派が出来てくるんです。

京都の立命館大学で「連続宗教講座」というのがありまして、よばれて行つて話をしたんです。大勢の方がおられて、その時、若い学生さんが「和尚、仏、仏つて言いますけど、我々若い者にサツと入るような言葉で言うたらなんでしょうか？」と難しい質問されたんです。

それで考えたんですが、インドのお経に『涅槃

槃経』というのがあつて、「一切衆生悉有仏性」と説いています。すべてのものに仏さんの性が宿ると書いてあるんです。この「一切衆生悉有仏性」という言葉が中国を経て日本に入つてきたら、「草木国土悉皆成仏」という言葉に変わるんです。草も木も国土も、こんな抽象的なものがちゃんと成仏する、皆仏さんやと言うてる。

そういう風に考えていきますと、仏というのは特別なものではなくて、一切衆生に宿つているものです。草にも木にも国土にも、すべてに命が宿っています。すべてのものが仏やということ、すべてのものが生きている。すべてのものに命があるということ、仏というのは命ということではないのかと、私は思ったので、仏さんというのはすべてのものに宿つている、尊く、かけがえのない、そして平等な命ですと答えました。それにしても、不思議なもんです

なあ、命、生きてるといふのは。

皆さん今朝目覚めたときに何を一番に思いましたでしょうか？ 雨が降つてるなと思わはつたらんちやいますか？ 今日は善光寺さん行かんらん言うて、女性が多いですから、一番に鏡を見て、ちゃんとそれぞれのチェックをして来てただただわけてございます。

今朝目が覚めた。不思議やないですか。若いやら年寄りやら関係ないです。目が覚める保証はないのです。不思議ですねえ。今朝目が覚めない人もいるのです。その命には見える命と見えない命があります。見える命といふのはこの体です。こんな不思議な体はない。生きてこの不思議な体を支えているのが見えない命です。見えない命が、見える命を支えている。その力、見えない命に「おおきに、ありがとうございませう」と感謝を述べられるといふのが人と

しての一つの条件とちがうか？ と私はその時  
言うたことを思い出します。

私がこうして立つていられるのも、大宇宙のエネルギーをいただいております。大自然の恵みをいただいております。人々の多くのはたらきを得てるんです。そうでなかったら私はここに一分たりとも立つてはできません。人間の命は見えない命が支えとる。それを宗教的生命と申うてはどうでしょうか。見える命が生物的生命なら、見えない支えてる命は宗教的生命といふことではないやろかなと、私は思うんです。

私は毎朝五時に本堂へ入つてお勤めをして、自坊に帰ると七時頃なんです。その間ずっと諸堂をめぐつてお参りしたりするんですけど、ある夏の朝、雨が降つてました。傘をさして山道を通つて、寺務所で残務整理をして、七時頃帰る時にはもうからつと晴れてました。しづくが

ポトポト落ちて水蒸気が上がるようなそんな山道を歩いてましたら、五、六人の若者が歩いてました。見ていると、後ろから行ってズボン上げたろかなと思いました。なんであんな格好するんでしょうな。それはよろしいけど……。

通りすがりに「おはようさん！」と言うたら、黙っていますねん。機嫌が悪いんやなと思ってもういつべん大きな声で「おはようさん！」と言うたら、一人の男の子が邪魔くさそうに「オイ」と挨拶やら何やら分からん返事です。

「こんな時間にお参りですか」と言うたら、「そんなんちやう。お参りとちがうで。昨日一晩じゆう京都の町の中で遊んでん。これから大阪へ帰るねんけど、遠足で行ったことあるさかい清水寺に来たんや。お参りとちがう！」

お参りとちがうて、そんな見たら分かりますやん。話のついでにそう言うたんです。「この朝の空気うまいなあ！」と大きな声でちよつ

とオーバーに言うたら、

「おっちゃん、こんな臭いで。なんや知らんけど木の匂いかなんか臭い」

「臭いかしらんけど、この朝一番のとれたての空気や。あんた遊んではった京都の町の真ん中ではこの空気は味わえへん。この朝のとれたての空気、よかつたらあんたの後ろのリユックサツクいっぱい持って帰ってもかめへんで」

「なんでやねん」

「なんでやねんて、この空気はタダやさかい、なんぼ持って帰っても私らのとこ影響ない」

「そんなもん、空気タダに決まっとる」と憎たらしいこと言いますねん。

「これあんた、タダの空気なかつたらどないすんねん。ここに立つてることできひんで。その空気がタダなんや。空気だけとちやうで魚もタダ、大根もタダ、みなタダや」って、こう言う

たんです。

すると、その若い子らが私を取り囲んで

「おっちゃん、それはおかしい。空気がタダは分かるけど魚はタダとちがう。なんで魚はタダやねん、なんで大根タダやねん。おっちゃんスーパー行ったことないんか」

「行ったことある」

「そんなもんタダとちがうやろ。千円とか書いてあるやろ」。

そこで私はこの青年らとおんなじ位置で話ができるなと思ひまして……

「よう聞きなはれ。たとえば、こんな立派な魚を漁師さんが釣らはった。その魚に百円あげます言うてあげてはる漁師さんどこにいはる」

「いはらへん」

「ほら見てみい。魚タダやないか」

「……」

「こんな立派な大根できた。お百姓さんが大根

さん、あんたに十円あげる、言うて大根に十円あげてはるお百姓さんどこにいてはる」

「いはらへん」

「ほらタダや。きゆうりもタダや。みなタダや。コストはかかるで。千円かかるのか三百円かかるのかわからんけど、そらコストや。けど、魚も大根も大自然の恵みと違うか。それがなかつたら売ることではできひんねん。それはありがたいことやないかいな。大根だけとちやうで。

諸人よ もろびと 思い知れかし おの 己が身の

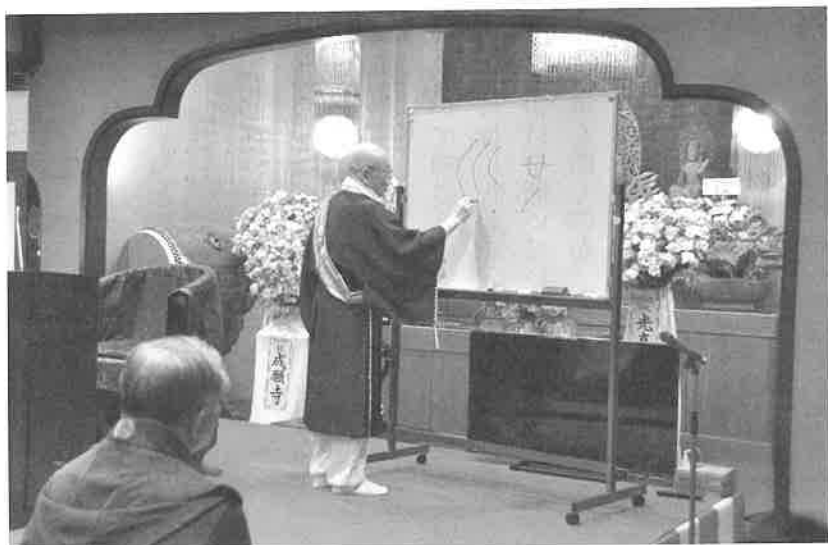
誕生の日は 母苦難の日

という歌があるねん。あなたをお母さんが生んだときには、生き死にを分けて生んでくれはったんやさかいに、お誕生日には『お母さんおおきに』と言うことから始めなあかん。あんたなんで字読めるねん？」

「学校へ行ったからや」

「学校へ行つたて、学校で字を教えてくれはつ





たん誰やねん。先生やないかいな。その学校を出してくれはったんは誰やねん？ お父さんお母さんとちがうんかいな。そしたら、字を読める時は最低限、先生やまわりの人や、お父さんやお母さん、その見えないエネルギーに支えられてるんと違うか？」というふうに話して「またお目にかかるな」と言うてお別れしたんです。

仏というものは命の仏格化なんです。仏教の根本思想は命の思想なんです。仏教だけやない、宗教は命の思想なんです。この前ローマ教皇が来ておられましたね。教皇の東京ドームでのお祈りは命に対してのお祈りなんです。命に対するお祈りということなんです。広島と長崎で亡くなった方々の御霊を供養する、そして多くの命に対してのお祈りをします。私は宗教というの根本は命の思想であると思うのです。

今年は漢字一字なんという字になるのか。私  
は手のひらに書いておりますが、「令」か「和」  
ではないかなと思っております。その中でも「令」  
という字をずっと稽古しておりますけど、言わ  
んようにしてください。その時にならんとわか  
らんでございますが……。

仏教の思想は命の思想と申しましたが、「命」  
と同じ意味合いをかたちにした漢字が実は「令」  
という字です。令という字は人が冠をかぶって  
ひざまづいて神さんの声を聞く姿を表していま  
す。命も同様に祝詞を入れる箱を前に置いて神  
さんのお告げを聞いているかたちなんです。

どんな声を聞くのか。人は見えないものによ  
って生かされているということですよ。それに対  
する感謝を述べる、そういう敬い慎む姿を表し  
ているのが令ではないかと思っております。

長くなりました。申し訳ございません。ご静

聴賜りましたことあつく御礼申し上げます。

五十年前に善光寺をお建てになりましたこの  
方丈さまのご遺志が今日こうして立派に花が咲  
いておりますことを皆様と共にお慶び申し上げ  
たいと思います。

またお目にかかるかと存じますが、よろしくお  
願います。

ありがとうございました。



# 「ごころの耳を澄ませて」

善光寺住職 黒田博志

こんにちは。ただいま、方丈様よりご紹介いただきました横浜市港南区にございます善光寺の住職を勤めさせていただいております。

今年も方丈様よりお話をせよとの命を受けましたので、皆様の貴重なお時間を頂戴いたしましてお話をさせていただきます。

本日、これよりお勤めいたしますご法要はお盆に因んだ「施食供養」でございます。

お盆と言いますのはご存知の通り、七月十三から十六日、あるいは八月十三から十六日というのが通例でございます。

お盆は皆様のご先祖様や大事な亡き方々が仏さまとしてご自宅にお帰りになり、ご家族の皆様とご一緒にお過ごしいただくとても大切な期間であります。

今年初盆をお迎えになられる方々もいらつしやいます。皆様の大切な亡き方々が仏さまとして初めてご自宅にお帰りになり、ご家族の皆様とご一緒にお過ごしになるとても大事な大事な期間でございます。

この行事は元々はインド由来の行事で、餓鬼に供物を施す供養でしたが、中国の儒教や道教



の影響を受けて先祖供養が合わさり、日本独自の「盂蘭盆供養」の形になりました。私はこのような供養のあり方は素晴らしいと思います。いにしえよりこの期間は、亡き方を偲ぶと同時に命の尊さ、命のつながりの尊さを感じるとても大事な行事でございます。

ここからお勤めをいたします施食供養とは、別名「無遮会」と申しまして「遮ること無し」と書きます。

また「水陸勝会」とも言い、水と陸……つまりこの地球上で最も勝れた供養と言われています。この法要は隔たりなく一切合切すべてのの、さらに永い間やさしさにふれることなく、供養されることのなかつたすべての御霊に対して供養申し上げる法要です。

普段のご法事、回忌法要はご自分の近しい仏

さまに對しての供養ですが、この施食法要は、ご自分の近しい仏さま、ご先祖様だけでなく、今現在、直接に自分との縁が有る無しに関わらずすべての精霊、生きとし生けるすべての命に對して分け隔てなくご供養申し上げるといふ在り方です。

自分のご先祖様との命のつながりというのはわかりますが、現在、直接に自分との縁が無いという命も実はすべてつながっている命です。生きとし生けるものすべての命に對して分け隔てなく平等に供養申し上げるといふのが施食供養です。

さて、皆様はどのようなお気持ちでお盆をお迎えし、務めていらつしやいますでしょうか？

私は「布施行」を心がけて勤めております。

布施というと我々僧侶に對する財施というものが思い浮かぶと思いますが、それだけではな

く、心でも物でもなんでも施すという行を布施と申します。

施す側、受ける側、施される物の三つが全く執著がないことが大事です。

施す側は、見返りを求めない心で行じるといふこと。

受ける側は、ただただ素直な心で感謝して受け入れるということ。

施される物も人間の価値観を離れたものですか、その物が高価であるとか、高価でないとか、好きなものとか、嫌いなものといった人間の勝手な価値観を離れたありのままのものであります。

例えば、ご先祖様のお参りをしたので：なにかよいことが起こりますようにとか、人のためになることをしたので：自分にもなにかしてほしいといったような見返りを求める心を起こさずに、ただ一心にその方を思い行じて行くことが大事です。



お盆はご先祖様、皆様の近しい仏さまが自宅にお帰りになります。その方々を思い一心に布施行を尽くすということです。

大事なお客様がお見えになるが如く、心を尽くすということです。

お家のお掃除をしたり、お仏壇のお掃除、盆棚の準備、お墓掃除をします。お供えのお花やお線香、お灯明、果物、野菜なども用意します。水の子と言って、洗米にナス・キュウリなどを糞の目に刻んで混ぜ合わせ、蓮の葉の上に盛り付けてお供えします。

これはご先祖様に対してではなく、永い間やさしさを受けることなく、供養されなかつた御霊に対してのお供え物になります。また、ナスやキュウリで作った牛や馬をお供えします。

できることを精一杯心尽くします。

そして、十三日、玄関先で迎え火を焚きその火をまたぎ、一緒に家に帰ります。お盆中はお

仏壇、盆棚のお参りはもちろんのこと、お膳をお供えしたり、ご家族で仏さまのお話をしたり、そこにいますが如く過ごします。

そして十六日送り火を焚いてお送り致します。

お盆の供養とは、こちらからだけの一方通行ではなく、仏さま、ご先祖様からの布施行もいただいております。

今、目の前には、亡き方々の姿や声は見えませんが、聞こえませんが、心の目を見開いてみれば、亡き方の姿や声はよみがえってきます。

皆様はどうですか？ よみがえってきませんか？

私は師匠の姿や声がよみがえってきます。師匠というのは父であり、先代の住職であります。先代は今から十五年前に他界しております。

「博志大丈夫か？ なんとかなるか？」と聞こえてきます。

生前よくそのように声をかけてもらいました。常に心配してくれていたんだと思います。

でも当時はその言葉や思いを素直に受け入れることができない時期もございました。

師匠にそのように言われると、

「大丈夫だし、なんとかなってるし、全く問題ないし」というように、とても反抗的で素直に受け入れることができませんでした。

それが亡くなつてから、師父の私に対する思いをやつと素直に受け入れることが出来るようになりました。

亡き方の声に耳を傾けること。

亡き方の声に耳を傾けるといふことは、その方のご生前よくおっしゃっていた言葉を思い出したり、それを実践したり、また、こういう場面では何ということをおっしゃるかと思いを廻らせたり、その方のお心であったり、思いであったりするものを、仏さまからの布施行として、





すべて素直に受け入れるということですよ。

「脚下照顧」という言葉をご存知ですよね。

これは「足元を見なさい」……「履物をそろえましょう」といった意味です。

さらには、「我が身を振り返り、自分自身をしっかりと見極めなさい」という意味でもあります。

よく禅寺の玄関や手洗いに、記されていることがあります。私どものお寺にも玄関先にございます。この言葉を見るたびに私は先代を思い出します。

私の子供のころ父に「下駄、なおせや」とよく言われました。

私は六人兄弟でございまして、子供のころは、いつも玄関は子供の靴ばかり。ひとり二足も出

ていたら、子供だけで十二足。それはもうめちやくちやです。

だから、常に「下駄をなおしなさい」「下駄は揃っているか」と言われました。

父が通夜のお勤めから帰ってくると、

「オーイー！ 素子、武徳、直子、泰志、博志、賢志みんな集まれ！」と聞こえ、

「ハイ！」と行って、六人全員玄関に集まるんです。

そこで「下駄がそろってないぞ」と言われ、みんなで揃えるんです。

成人して僧侶の道を歩みだしてからは、「仕事は足元からだぞ」とよく言われました。

母にきくと先代もお師匠さんから「武志、仕事は足元からだぞ」とよく言われていたそうです。

先代の存命中にこんなことがありました。

私どものお寺の客殿はテーブルの周りに座布団が敷いてありまして、先代は座布団も乱れていると、自分でも直しますが、私にも「座布団が乱れているから直しなさい」とよく言っておりました。

ある日、先代とご法事を勤めた後、片付けをしていると、先代から、「座布団をなおしておけや」と言われ、すぐに直さないと忘れてしまうので、手には荷物を持ったまま、足で座布団をなおして、ひどく叱られたことを思い出します。

先代の姿や声が今でも私の中で生き続けており  
ります

福井県永平寺開祖道元禪師さまがお示しになられたお言葉、



ちしょうさんぎょうもと  
治生産業固より布施ふせに非あらざること無なし

これはすべての行いは布施行であるということ  
です。

見返りを求めない心、素直に受け入れる心で  
精進して参ります。

師匠が自分を弟子にしてよかったと思ってい  
ただけるような和尚になれるよう布施行に邁進  
して参ります。それがまた、師匠に対する私の  
布施行でございます。

皆様におかれましては亡き大切な方々のお姿、  
お声を感じ取りながら穏やかにお盆をお過ごし  
いただきますことを心より念じて本日のお話と  
させていただきます。

〈連載〉

# 『普勸坐禅儀』

## に学ぶ その十三

駒沢女子大学教授 安藤嘉則

〈本文 書き下ろし文〉

公案現成こうあんげんじょう、羅籠未だ到らず。若し此の意を得ば竜の水を得るが如く虎の山に靠るよに似たり。

〈現代語訳〉

〔坐禅における〕真理の実現（公案現成）にあつては、もはや網や籠のようなもの（心の煩惱・思慮分別）に束縛されることもない。もしこの極意を会得するならば、水を得た龍のように、また山に住む虎のように

自由自在となるのである。

最初に「公案現成」という大変重要で、かつ意味深い言葉が登場します。まず「公案」という単語ですが、中国の禅林において「公府の案牘」という言葉に由来する言葉とされてきました。この「公府の案牘」とは公の法則条文、あるいはお上の法令かみとして必ず守らねばならぬものを意味し、これが転じて仏祖が開示した道理・真理そのものを意味します。

江戸時代、この『普勸坐禅儀』を解説した面

山瑞方という学僧は、「公案」の「公」とは日本では將軍のことであり、「案」は日本全国に天下の定法を示した高札であると説明した上で、「宗門の公案は三世諸仏歴代祖師の娑婆三千國土への号令なり」と述べています（『普勸坐禪儀聞解』）。つまり曹洞宗の公案とは、諸々の仏祖の私たちへの号令、お触れのようなものと解釈しています。それは大切な仏法の真理そのものを示したものであると言えます。

こうした仏法の真理そのものを表すことから転じて、修行者が参究すべき大切な課題となり、中国宋代の臨済宗ではこうした古人の言句や行実を公案として取り上げて参究する方法ができてきました。これを看話禪もしくは公案禪といえます。この看話禪は日本の臨済宗に受け継がれ、江戸時代には白隠慧鶴が登場して日本臨済宗の看話禪を確立し、今日に至っています。

ところで、夏目漱石の『門』は、漱石が明治

二十七年の年末から正月にかけて鎌倉円覚寺の釈宗演に参禅したときの体験をふまえた小説であり、近代臨済宗の看話禪の様子がよく描かれています。この小説の中で、主人公宗助が「父母未生以前の本来の面目」という公案を与えられ、四苦八苦している様子が具体的に描写されています。この公案は「おまえさんのお父さんとお母さんが生まれる前の本当のあなた自身（本来の面目）を見つけてきなさい」というもので、これは常識的な頭ではけっして答えることはできません。にっちもさっちもいかず漱石は結局参禅をあきらめてしまうのですが、漱石は『門』の最後のシーンで、主人公宗助に次のように語らせています。

彼は門を通る人ではなかった。また門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。

この「門」とは、鎌倉円覚寺の山門が具体的なイメージとして描かれていたのですが、同時にそれは深遠な禅の関門であったといえるでしょう。

なお私たちが日常的に用いる「玄関」という言葉は禅宗で生まれた言葉です。本来この言葉は「玄妙な道に入る関門」、つまり幽玄で深遠な禅の道に入る最初の関門でした。それが禅寺の方丈の入り口を指すようになり、それが一般化されて住宅の入り口になったのです。

さて、改めて『普勧坐禅儀』の文章「公案現成、羅籠未だ到らず」に戻りましょう。前述のように「公案」というと、修行者に与えられる課題として一般には知られていますが、この『普勧坐禅儀』の文で道元禅師が用いる「公案」とは、前述のように「公府の案牘」という意味から転じた「仏法の真理」という意味で用いられています。そして「公案現成」とは、坐禅にお

いて絶対的な真理（公案）が現成するということとです。「現成」とは単に「現れる」という意味でなく、「現れ成立していること」つまり「実現していること」を意味しています。公案現成は坐禅における真理の実現と言えましょう。しかし、参禅経験のある一般の方で、この言葉をリアリティをもって受け取められる人は、なかなかおられないのではないのでしょうか。「絶対的な真理」などと説明されても、それは実際にはごく限られた人しか体験できない、遠い世界の絵空事のように感じる方もおられると思います。また、両大本山をはじめ、全国各地の曹洞宗の専門道場において、厳しい修行生活に励む多くの修行僧の姿を見ると、そもそも坐禅修行の道自体が、一般の人々にとっては狭き門のようには思われず。

従来、道元禅師の教えの特徴として「一箇半箇の接得」ということが言われてきました。こ

それはたった一人でも、もしくは半人でもいいから本物の弟子を育成するという意味で、道元禅師の峻厳な家風を象徴し、その教化のあり方を特徴づける言葉でした。また道元禅師の『正法眼蔵』という著作を紐解きますと、大変難解な箇所がたくさん見受けられ、初学者にとっては取り付く島もなく、ちんぷんかんぷんである文脈も少なくありません。このように道元禅師の教えは、大変難解で特別な世界のように見えます。

しかし、一方において道元禅師は、立教開宗宣言ともいうべき「弁道話」という書の中で、仏法を弘め衆生を救わん（「弘法救生」とする高い志が表明されています。それは「大宋紹定のはじめ、本郷にかえりし。すなわち弘法救生をおもいとせり。」というものです。中国の宋代紹定元年（一二二八年）に道元禅師は中国での修行を終えて日本へ帰国しましたが、そのときの抱いたこの「弘法救生」の思いが、道元禅

師の原点にあることは忘れてはならないと思います。

従来、道元禅師のこの「弘法求生」の思いと「一箇半箇の接得」の精神とは、相反するのではないか、そんな問題意識から、多くの道元禅師研究者が意見を述べてきました。その中で特に近年注目されるのは、西澤まゆみという方の「一箇半箇の接得」考」（角田泰隆編著『道元禅師研究における諸問題』近代の宗学論争を中核として）春秋社）という論文です。西澤氏は、これまでの一箇半箇が出てくる文脈を精査し、この言葉の本来の意味は「一箇半箇までも漏らさず接得する」であることを明らかにされ、道元禅師は生涯仏道を求めてくるすべての人々を教化するという意識は一貫していたと述べておられます。この西澤氏の見解はこれまでの「一箇半箇」の解釈とは異なり、道元禅師の教化の基本姿勢を考える上で大切な指摘であると思

ます。

道元禪師の書かれた著作は確かに難解なのですが、今から八百年近く前に書かれた本が時代を超え、日本人ばかりか西欧の人々にも紹介され、生と死の根源を見据えた深い思索が今日の人々の生き方に影響を与えています。仏道を極めた道元禪師の教えの中に、時を超え、国を超えて伝えられる力があることがわかります。ですから私たちも時代を超えて伝えられた道元禪師の教えがどのようなものであったのか、真贋に受け止めなければならぬと思うのです。

とはいえ、この『普勸坐禪儀』は、漢文体、それも散文ではなく、対句を多用した四六駢儷しよくべんれい文ぶん（もしくは禪林四六）という特殊な文体で書かれているので、目下の「公案現成」について細かな解説は付されていません。しかしこの「公案現成」の内容をテーマにした書物があります。それは『正法眼蔵』『現成公案』です。この「現

成公案」の巻は天福元年（一一三三年）、深草興聖寺（京都）を道元禪師が開かれた年に書かれたもので、九十五巻を数える『正法眼蔵』の中でも最も早く書かれた巻です。奥書には俗弟子楊光秀に与えたと言われ、『正法眼蔵』でも代表的な巻の一つです。「仏道をならうというは自己をならうなり」といった有名な一文があります。今回『普勸坐禪儀』のこの一文について「現成公案」を手がかりに説明していきたいと思えます。

この「現成公案」では、ものの有り様を「前後裁断」という言葉で説明し、それを薪と灰の喩えで説明しています。通常、私たちは、薪が燃えて灰になると考えます。薪が先であり灰は後と連続して見えています。しかし道元禪師は、薪はあくまでも薪、灰はあくまでも灰であり、前後は裁断されているのだと説くのです。そこで道元禪師は人の生と死についても次のように



論じます。

人の死ぬるのち、さらに生とならず。し  
かあるを、生の死になるといはざるは、仏  
法のさだまれるならひなり。

〈現代語訳〉

人が死んだ後、さらに戻って生となるこ  
とはない。そうであるから、生が死になる  
といわないのは、仏法が古来決まり切った  
こととして言ってきたことである。

つまり、人が死んだとき、生が死になると言  
わないのが仏教の伝統的考え方（仏法のさだま  
れるならい）と示されています。通常、人が亡  
くなれば、それは人の生から死への移行を意味  
しますが、そういわないのが仏法の定説とする  
のです。

さらに道元禅師は続けて「冬の春となるとお  
もはず、春の夏となるといはぬなり。（冬が春  
になるとは思わず、春が夏となるとはいわな

い。）と述べますが、これも常識的な見方では  
理解できません。季節は冬から春へ、春から夏  
へと巡っていきませんが、仏法はそうは見ないと  
するので。

こうしたとらえ方は、ものごとはすべて前後  
裁断されているという立場からの見方であり、  
それは仏教思想の原点ともいえる「空」の思想  
に由来します。いわゆる『般若心経』の「色即  
是空」の教えです。「空」とは数学ではゼロを  
意味し、仏教では「実体としては無い」という  
意味です。たとえば今年五十歳になる佐藤一郎  
さんという人は、「空」なのです。しかし佐藤  
さんにとってみれば、自分は五十年佐藤一郎を  
やってきたので、必ず佐藤一郎を佐藤一郎た  
らしめている何かがあると考えがちです。すなわ  
ち、どこかに変わらない実在としての佐藤一郎  
があると思いたくなるのですが、よく考えてみ  
ると、そんなものはどこにもありません。二十

歳のあの頃の自分が本当の佐藤一郎なのだ、と  
いっても仕方ないのです。それはいわば思い出  
でしかありません。実は昨日の自分と今の自分  
も九九%同じであつても実は違います。肉体的  
には瞬間瞬間血液が流れ、食べ物を消化したり、  
排泄したり、生命活動は瞬間瞬間行われていて、  
昨日どころか、一時間前の自分、一分前の自分  
ともわずかですが違う自分です。つまり「前後  
裁断」された存在なのです。

私たちは今のこの瞬間を生きています。昨日  
の自分はどこにもなく明日の自分もどこにもあ  
りません。にもかかわらず、今の一瞬を生きる  
のではなく過去に生きている人のなんと多いこ  
とでしょうか。昨日の自分に絶対に立ち戻れな  
いのを昨日を引きずり、何年も前の出来事が今  
日の私の心にちゃんとトラウマとして残り、今  
日の私を苦しめています。過去だけではありま  
せん。ありもしない未来の不安にかられ、今が

見えない人もいます。

たとえば余命をいくばくもないといった場合、  
不安のあまり絶望し、今のかげがえのないひと  
ときを見失う方もおられます。逆に死を目前に  
して残り少ない命を精一杯生きられる方もいま  
す。

道元禪師は「生也全機現、死也全機現」とい  
う中国の圓悟克勤という禅僧の言葉を重んじて  
『正法眼蔵』「全機」を著されています。その意  
味は「生きるときは全力で今の自分のハタラク  
（機）を現し出せ、死ぬときは全力でそのハタ  
ラク（機）を現し出せ（死にきれ）」という意  
味ですが、要するに今のかげがえのない命を生  
きよということにつぎると思います。

さて、『普勸坐禅儀』に「公案現成」という  
言葉について、『正法眼蔵』「現成公案」を手が  
かりに見て参りました。言葉の解釈としては、  
仏法の真理が実現していることということでは

が、具体的には我が身を調べ、一呼吸一呼吸を大切に、正しく坐ること（端坐）であり、それはかけがえのない今を生きる我がいのちの実現に他ありません。

こうしたかけがえのない命をいただいで今を生き、そのいのちを実現する者にあつては、もはや束縛するものではありません。それが『普勸坐禅儀』でいう「羅籠未だ到らず」という言葉です。元来「羅籠」の「羅」とは魚を捕まえる網であり、「籠」とは鳥を入れるカゴを意味し、ともに生き物を束縛する道具のことですが、それは我が心を束縛する煩惱や分別心のことを意味します。先の面山和尚はこのところを「上来の現成公案を得れば一切の知見解会思慮分別の羅籠にとりこめられぬ」と注釈しています。

こうした坐禅における公案現成の意味を体得すれば（若し此の意を得ば）、それは「龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。」とい

うことになります。この道元禅師が示した二つの喩え（水を得た龍と山にいる虎）は、本来の居場所にあつて大きなハタラクキを発揮できる有り様を示しています。

この『普勸坐禅儀』は坐禅という実践を説明するのに、禅門独特の表現形式の制約を受けつつも、坐禅という実践的修行方法の心随を示しておられます。この「公案現成」という言葉一つとっても、その中に込められた内容の深さを改めて思わざるをえません。今『正法眼蔵』「現成公案」を手がかりに説明いたしました、これも頭だけの概念的理解では『普勸坐禅儀』の意図するところと離れてしまします。こうした一つ一つの言葉について坐禅を通して常に初心にかえりつつ参究を続けていくことが大切であると思えます。

曹洞宗のご詠歌は、「梅花流詠讚歌」といい、お釈迦様や道元禪師・瑩山禪師のご一生や曹洞宗の教えが歌詞となっています。お唱えをしながら楽しく仏教に触れることができます。善光寺では昨年より毎月一回、御詠歌教室を開催しています。

講師は、曹洞宗梅花流特派師範 栃木県高德寺副住職渡邊清徳師です。  
春彼岸法会には御詠歌のお話を頂き、一緒にお唱え致しました。

## 「仏教徒の心がけ」

梅花流特派師範 渡 邊 清 徳

(高德寺副住職)

おはようございます。皆様今日もお参りご苦労様でございます。今日は特に天気が良く暖かいですね。「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますように、これから段々と日も延びてきますし、

過ごしやすくなってくることでしょう。この季節、暖かくなってくれるのは良いのですが、今日もマスクをされている方が多く見られるように、花粉症の方にとっては本当に辛い時期かと



思います。ウチのお寺の周りは杉の木ばかりで  
 すので、風が強い日などは黄色い花粉が空に舞  
 うのが目に見えます。外に停めてある自動車な  
 ども花粉で色が違って見えるくらいです。そん  
 な中、この善光寺様のお彼岸会の法要に足をお  
 運びになられる皆様の心がけはとても尊いこと  
 だと存じます。

さて、今日もこの時間は、いつものように御  
 詠歌の練習をしましょう。そして、みんなで声  
 をそろえてお唱えをして、ご法要に花を添えた  
 いと存じます。どうかご協力の程よろしくお願  
 い申し上げます。

去年もお話し申し上げましたが、彼岸（心穏  
 やかな境地）に至るためには、自分への執着の  
 心を無くし、自分より先に他を優先させる心が  
 大切だということをお伝えしました。そのこと  
 がこれからのご法要で最初に読まれる『摩訶般  
 若波羅蜜多心經』に説かれております。皆様も

よくご存じのお経ですよね。「摩訶」とは、昔のインドの言葉で「マハー」「偉大なる」という意味です。「般若」は「パンニヤ」で「智慧」、「波羅蜜多」は「パーラミッタ」で「到彼岸」という意味です。

「偉大なる智慧を以て彼岸に至る、心髄のお経」ということです。お経の内容をざっくり申し上げますと、私たちの前にあるすべての現象「色」は「空」であり、実体のないものだと説いています。「色（形あるもの）・受（感覚）・想（認知）・行（意識）・識（分別）」（五蘊）という心の働きや「眼（色）・耳（声）・鼻（香）・舌（味）・身（体で感じる）こと）・意（心で感じる）こと」という感覚器官も「空」であり、実体のないものであるから、それにこだわったり、とらわれの心を無くしなさいと言っています。

観自在菩薩は、この般若の智慧（真理）を実践したがゆえに、間違った考えや妄想から解き

放たれ、完全な心の平安に至ったと説かれています。更に般若心経の最後には「ギャーテーギャーテー」とあります。ここは、とても大切な言葉なので漢字に訳さず、音写といって言葉の音を漢字に充てています。「ギャーテーギャーテー」の意味は到彼岸を促す言葉とされています。超訳ですが、この言葉の意味には「空を理解し、とらわれの心を無くし、みんなの心がおだやかになつて、どんな人も幸せでありますように」という願いが込められています。

以前、私が四国のお遍路をしている時、トラックの運転手さんが私を車に乗せてくれたお話をしたかと思えます。トラックの運転手さんは、遍路をしている和尚さんを見つけて車に乗せてあげた後、とても感謝され、清々しい気持ちになったということです。運転手さんは、人に親切をすると自分も喜びを共有できて、清々しく

なれることに気づいたので、次にお遍路をして  
いる人を見つけたら、また車に乗せるお接待(布  
施)をしようと思に決めていたということだ。

人間は、他人に親切をした時、相手が喜んで  
くれた気持ちを感じることができません。  
これは決して親切の押し売りではなく、見返り  
を求めない純粋な真心からの行為だからです。  
そんな真心からの行為を歌った御詠歌がありま  
す。『四摂法御和讃』です。今日はこの曲を練  
習したいと思います。お手元のプリントをご覧  
ください：

「四摂法」とは、菩薩が衆生を悟りに導く為  
の四つの方法を言います。「布施」「愛語」「利  
行」「同事」です。

「布施」とは、施しの心、分かち合う心のこ  
とです。「愛語」は、やさしい思いやりの言葉  
を心がけることです。「利行」とは、相手に利

益のなることを進んで行うこと。ボランティア  
もその一つです。そして「同事」は、相手と同  
じ目線に立ち、どんな人も平等に扱うことを言  
います。

では、この四摂法の教えがわかりやすく説い  
てある『四摂法御和讃』をお唱えしてみますの  
で聞いていてください。途中歌いたくなったら  
一緒に歌われても結構です(笑)

♪「唱え奉る〜四摂法〜ごわーさんにー」

一、幸せ願ひもろともによ

財と法をわかちあい〜♪

尽くす真実の営みに〜♪

人皆菩提の道を知る♪

二、慈悲の心の泉より〜♪

湧き出す愛の言の葉は♪

和みと笑顔永遠に生み♪

人の世動かす力なり〜♪



三、己おのれの益ぎちを先とせず♪

衆生ひとの為ためにとなす利行わざは〜♪

生きとし生けるものみななの♪

光となりて世を照らす〜♪

四、隔へだての心なきゆえに〜♪

流水ながれの海うみに入るいるに似て〜♪

ともに生きんと相集あひつどい〜♪

励あきらまし暮くらす爽さわやかさ〜♪

ありがとうございます。一緒にお唱えして下さり感謝申し上げます。今日のプリントは、両面刷りになっております。表には『四撰法御和讃』の歌詞と解説が載っております。

裏面に返すと五線譜が印刷されております。まず表の歌詞と歌詞に込められた意味をご説明して、裏面に返して歌の練習をするような感じで進めてまいりたいと思います。ちょっとあわただしい感じになるかと思いますが、お付き合



願います。

一番の歌詞から読んでまいります。

幸せ願ひもろともに

財ものと法おしえをわかちあい

尽くす眞実まことの営みに

人皆菩提さとりの道を知る

こちらは「布施」の教えを説いております。施しの心、分かち合いの心です。歌詞の意味が載っているのでご覧ください。「すべての人々の幸せを願って布施を心がけましょう。布施とは物のやり取りではなく、お互いを思う心と心のやり取りです。それは互いに見返りを求めることなく、わだかまりのない執着を離れた清々しい行為です」：

歌詞の中に「財と法をわかちあい」とありますが、布施とは本来、お坊さんがみ仏の教えを説いて、在家の方がその見返りに物やお金を施すことを言います。そして「尽くす真理の営み

に」というのは、「等三輪空寂とうさんりんくうじやく」という教えが

ありまして、和尚さんからの布施として説かれたみ仏の教えと、在家の方から施された物やお金、そして互いに施し合ったその心・思い、この三つが立場も同等でわだかまりがないから「空寂」だということなのです。そのやり取りは「真理の営み」であり、正しい布施はそのようにして行われなければならないということなのです。お互いが布施を行わずることによって、「人皆菩提さとりの道を知る」執着から離れ悟りの道に近づくということなのです。

それでは一番をお唱えしてみましよう。

〜みんなでお唱え〜

それでは二番の歌詞です。

慈悲の心の泉より

湧き出す愛の言ことの葉はは

和みと笑顔永遠とわに生み

人の世動かす力なり

「どんな人の心にも相手を思いやる慈しみの泉があります。自ら慈悲の心を育み、互いに慈しみの言葉を心がけましょう。その愛語は、相手の心を和ませ、互いの笑顔を生むことでしよう。また時にはその人の人生をも一変させる力もあります」：

道元禪師は「愛語は愛心よりおこる愛心は慈心を種子とせり」と言っておられます。どんな人にも心に慈しみの種があるのだと。この歌詞の中では「泉」となっています。相手をいつくしむ心の泉から愛語が湧き出てくるということです。この後の法要で読まれる『修証義』の第四章「発願利生」にも「愛語能く廻天の力あることを学すべきなり」とあります。慈しみの言葉が相手の心や考え方も一変させるということです。皆さんも愛語によって、それまでとは違う概念に気づいた経験があることだと思います

す。自分が掛けてもらって嬉しかった愛語は多くの人に語り掛けましょう。また言われて嫌だったことはしないようにすることが大切ですよね。それでは二番を唱えてみましょう。

～みんなでお唱え♪～

次に三番です。歌詞をご覧ください。

己おのれの益ぎを先とせず

衆生ひとの為にとなす利行わざは

生きとし生けるものみな

光となりて世を照らす

歌詞の意味は「生きとし生けるものすべてに福利を恵む仏心を心がけましょう。その心を利行ぎょうといい、他を優先させる心です。相手の立場になつての行動は、生きとし生ける者に明るい希望を与え、世の中を明るく照らすことでしよう」という意味です。

去年は、中国地方で集中豪雨があり、多くの



家屋が水に浸かり、泥だらけになってしまいました。家財道具も流されて、家の中に沢山の土砂が流れ込みました。被災された方の多くは、片付けようにも絶望と不安で片付けようとする気力も失せてしまったと思います。しかし、全国から多くの方がボランティアに駆けつけました。被害に遭われた方の立場になったらいたたまれなくなり、有給休暇を取ってボランティアに来られたとおっしゃっていました。自分の時間と体力を他人のために使う。まさに利行の実践です。被災された方々も寄り添って下さるボランティアの方たちのお蔭で明るい希望を感じ、復興への力が湧いたことだと思えます。

♪三番をみんなでお唱え♪

そして最後四番ですが、こちらは「同事」を歌った歌です。歌詞をご覧ください。：

隔へだての心なきゆえに

流水ながれの海うみに入るに似て

ともに生きんと相集あいつどい

励むねまし暮よるらす爽さわやかさ

歌詞の意味は「差別や偏見を捨て、互いの存在や価値観を認め、相手に合わせようとする姿勢を心がけましょう。それはまるで海がどんな川の水も受け入れるように、どんな人も広く受け入れようとする心です。そして、共に手を取り合って仏様の教えに照らされた暮らしをしよう」と励まし合い清々しく暮らしましょう」ということです。

今朝のニュースで「オリンピックおじさん」がお亡くなりになったとの訃報がありました。山田直稔なおしさんという実業家の方ですが、皆さんも一度はテレビで見かけられたことがあるかと思えます。派手な帽子を被って日の丸の扇を持って応援しているおじいさんです。来年の東京オリンピックでも応援しているお姿を拝見でき

るかと思っていましたが大変残念です。あの方がオリンピックの応援にハマったきっかけというのが、初めてオリンピックの応援に行ったメキシコオリンピックの開会式だったそうです。入場してきたメキシコの選手を背丈も似ているので日本人と勘違いしてしまい、グラウンドに駆け下りて一生懸命応援したそうです。当時からあんな格好で応援していたかはわかりませんが（笑）、会場にいた人たちは「何で日本人がメキシコ人を応援しているんだろう？」と不思議そうな顔をしていたそうです。しかし、今度は、日本の選手団が入場してきた際に、会場の何万人というメキシコ人が日本人を大歓迎してくれて、山田さんは嬉しくなったそうです。

『修証義』の「同事」の教えの所に、「佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし」とあります。まずは自分から他人の気持ちや立場に寄り添うと、今度は自然に

相手が自分の気持ちに寄り添ってくれるという意味です。山田さんの場合は、奇しくも勘違いでそうなってしまったワケですが、その体験があつて「どんな人も幸せになることを願っている。そこに人種や国の違いはない。そして沢山の人を喜ばせ、幸せにできる人こそが幸せになる」ということに気づいたそうです。それでは、この同事の教えの通り、大らかな気持ちで四番をお唱えしましょう。

～みんなでお唱え♪～

ありがとうございます。この四撰法の教えは、現代社会と逆行しているじゃないかという意見があります。他人に施しても裏切られる。優しい言葉をかけても無視される。他人を優先させたら自分が後回しになる。差別や偏見はなかならない等……

確かにそういう人も世の中には沢山いらっし

やいます。でも、今日この善光寺様の彼岸会の法要にわざわざ足をお運びになつておられる方の多くは多分仏教徒の方だと思います。自分では自覚がなくても仏教にどこか拠り所を感じておられるのだと思います。私は、残りの人生どうせ生きるのなら仏教徒として清々しくいきたいと思つております。だから、周りや世間がそうであっても、あまり駆け引きや見返りを求めず教えを実践していきたいと思つています。

昨年暮れ、天皇陛下の会見がありました。陛下がご自身の「象徴」としての思いをお話になられました。それは、私が教科書で学んだ「象徴、天皇」というイメージと全く違いました。平成の時代は災害が多くありました。被災されて悲しんでいる国民を心から慈しみ、なるべくお金がかからないように工夫して被災地に赴き、つらい思いをされている方々をお見舞いされ励ましていらっしゃる姿こそが「象徴」としての振舞いで



した。陛下は、この三十年間、常に国民の安寧を念じておられ、「象徴としての心がけ」を貫いてこられたことに私はとても感動しました。

来月には、新元号が発表されます。どんな名前になるのかとても楽しみです。それと同時に新しい時代が始まります。国会では三十二万人以上の外国人労働者の受け入れが決まりました。将来、この日本の価値観なども大きく変わっていくことでしょう。そんな移り変わりの激しい世の中で、私たちが心おだやかで清々しく生きていくには、一人ひとりが柔軟で大らかであり、分け隔てなく他者に対する思いやりの心を忘れずに生きていくことが大切になるうかと思いません。

仏の教えは、頭では理解しても実践が難しいです。思っただけでもなかなかそうはいかない。また周りにも流されてしまいがちです。しかし、この彼岸会に善光寺に集う私たち仏教徒は、「仏

教徒の心がけ」を忘れず、日々の暮らしの中で  
少しでもこの『四摂法』の実践に励めるように  
努力したいものです。

それでは最後に皆さんで『四摂法御和讃』を  
お唱えしてこの時間を閉じたいと思います。



# 「いのちのつながり」

長泉寺住職 水庭 浩章

皆さま、池を思い浮かべてください。その池には、水面を覆いつくすように蓮の花が咲き乱れています。赤い蓮、白い蓮、水を弾いて、誇らしげに大きな花びらを広げている無数の蓮。その眺めは、とても幻想的です。

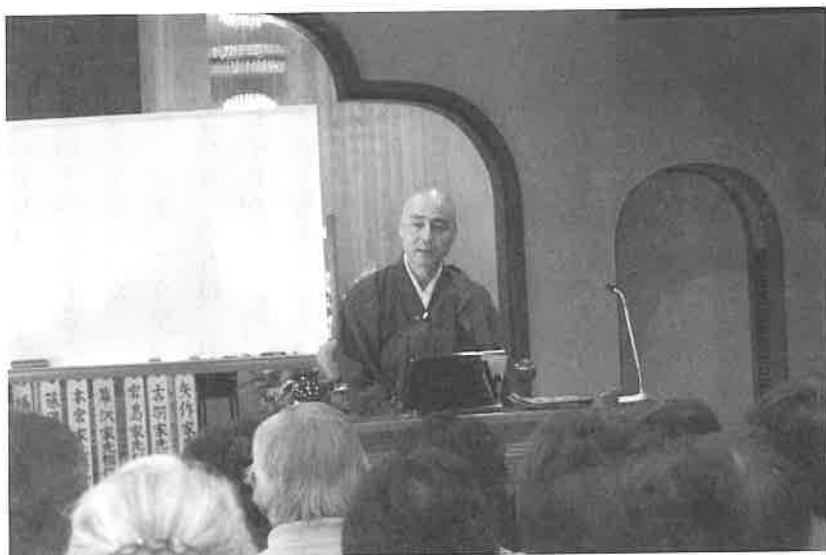
しかし、その咲き乱れている蓮の花の一つ一つを見ると、同じように見えるのだけれども、微妙に違ってきます。大きさも違えば、形も違います。色も、同じ赤でも、白に近い赤、黒に近い赤。白い蓮も、黒に近いもの、赤に近いもの、様々です。無数にある蓮も、ひとつとして

同じものがありません。

その水面に浮かぶ蓮の花の一つ一つは、私たち人間、ひとりひとりに例えることができます。同じ人間でも、大きいとか小さいとか、形がいいとか悪いとか、色がきれいだとかそうでないとか、私たち人間も、水面の上だけで、ああでもないとか、こうでもないとか、人と比較しながら生きていくところはないでしょうか。そして、その比べるという行為が、私たちが抱く、様々な苦しみの原因にもなっているのです。

では、仏教ではそのところをどう説いている





るのか。仏教では、目に見える水面の上だけを見るのではなく、水の中に目を向けることを説かれています。水中に目を向けますと、どの花にも例外なく、茎が付いています。その茎は、下へ、下へと伸びて、やがて泥中、泥の中に吸い込まれていきます。そして、更に泥の中に目を向けると、その茎は、ひとつの根、蓮根に繋がっています。水の中、更には、泥の中ですから、私たちの目には見えませんが、例外なく、ひとつの蓮根に繋がっています。花だけが独自に水面に浮かんでいることはありません。すべて、繋がっているのです。

そして、そのひとつの蓮根から、花を咲かせるための養分を、茎を通していただき、蓮は水面で、鮮やかな花を咲かせることが出来るのです。

人間も同様に、目に見える世界、つまり、蓮の花と同じように、水面だけを見て生きている

ところはないでしょうか。その、目に見える世界が、現実のすべてであると思つて生きているところはないでしょうか。

私たちが、いま、こうやつて生きていられるのは何故なのか。それは、目に見える世界において、それぞれが助け合い、支え合つて生きているということもあるでしょう。しかし、それだけではありません。私たちの目には見えないところ、つまり、今は亡きご先祖様方の支えがあつて、いまこうやつて生きていることが出来ることも事実です。

先日、私が住職を務めているお寺で九十九歳の女性がお亡くなりになりました。お戒名や葬儀中にお唱えする法語を作成することもあり、ご遺族の方に故人様のことをいろいろとお尋ね致しました。

そのお話の中で、お連れ合い様との出会いの

お話を伺いました。

故人様は、戦時中に満州で暮らしていたそうです。敗戦と同時に、日本に引き揚げるのですが、その道中がとても大変だったそうです。列車は爆撃を受けて動いておらず、とても道とはいえないようなぬかるんだ道を、毎日毎日歩いていたそうです。

その道中に、盗賊に襲われることもたびたびだったとか。多くの日本人が金品や薬などを盗まれたそうです。

ある日、故人様は大事にしていたネックレスを奪われそうになりました。決して放すまいと握りしめてしていると、ある男性が「手を切られるぞ」といつて、手を放させたそうです。大事な物は盗まれてしまいましたが、怪我をせずに済みました。

その後、その男性とは、船の中でも一緒にいて、やっとの思いで帰国した後、目出度く結婚

されたそうです。

そのお話を伺いして感じたのは、苦しい中、お互い生き延びてくれたおかげで、時同じくして満州にいたおかげで、お互い支え合って命ながら日本までたどり着いてくれたおかげで、いま、その家があるのだなということです。

故人様の二人の子供も、四人の孫も、沢山の曾孫も、いることが当たり前のように感じるけれども、もし、そこでの出会いがなければ、もし、どちらかが命を落としていけば、この家族は存在しないんだなということです。

そのことは、決して特別なことではなく、ここにいる私たちひとりひとりにも当てはまりますよね。いま、ここで、生きているのが当たり前のように感じるのだけれども、それは、過去の様々な因縁によって今の自分がある、そのことを自覚して、そのお姿は見えないけれども、お声は聞こえないけれども、亡きご先祖様方の

いのちを感じながら生きていく必要があるでしょう。

ご先祖様に限らず、私たちのいのちは、過去からの無限の恵みによって、いま、このときを迎えています。

少しスケールの大きな話になりますが、この世には、宇宙があり、銀河系があり、その一部に太陽系があります。その中の、太陽の存在、地球の存在、また、その距離であったり、地球を回る月の存在であったり、果てしない長い時間をかけてこの環境が創り上げられてきました。その条件によって、地球に大気が存在し、水が存在し、酸素が存在し、そんななか生命が宿り、さらに、長い長い年月をかけて、今の私たちがここに、このような姿で生きています。

今だけがポツンとあるものではありません。すべて、過去からの様々な因縁でつながっているのです。ですから、ご先祖様を大切にすること

はもちろん、過去のすべての出来事を、我が事として捉えていく必要があるでしょう。同時に、いま、ここを生きている私たちひとりひとりが、いまを大切に生きる。大きなお恵みを感じながら生きる。

近年は、異常気象と言われていますが、そのことも我が事として受け入れていかななくてはならないでしょう。自然は、人間の都合のいいようにはなりません。時に、大きな牙をむきだし、私たちに襲い掛かってきます。

最近も台風による大きな被害がありました。昨年は西日本豪雨被害。また、北海道、大阪、熊本など、日本各地で発生した強い地震。八年前には、国難とまでいわれた東日本大震災がありました。

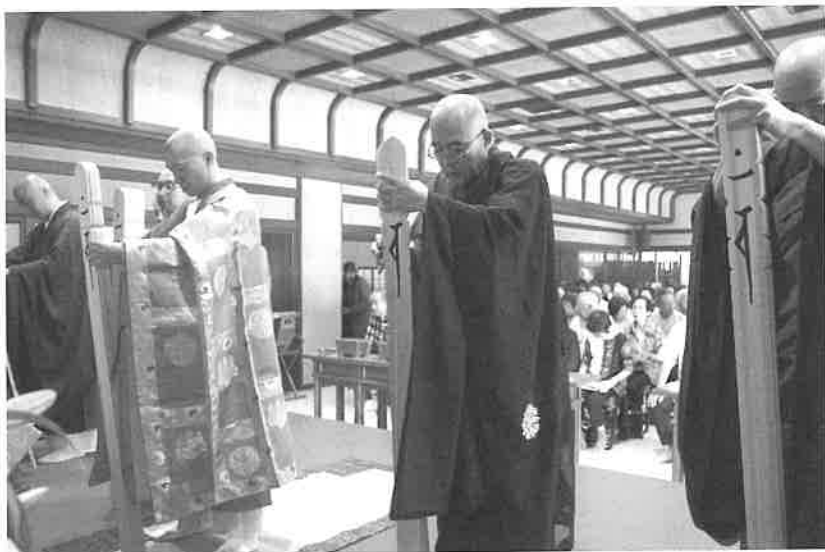
日本のみならず、世界各地に目を向けてみますと、多くの自然災害が発生し、多くの尊い

のちが失われています。その部分だけ見ますと、自然は怖いものであるという観念が生まれてきてしまっています。

しかし、一方では、自然は多くの恵みをもたらしてくださっています。日本には、四季折々の自然の姿があり、それぞれに、違った形で私たちを潤してくれます。世界に目を向けても同様です。常夏の地域、極寒の地域、熱帯の地域、砂漠の地域など、それぞれ自然の形は違えども、それぞれに独特の恵みを与えてくださっています。

どの地域がいいとか、どの地域が安全であるとか、そのようなことは人間の都合であって、どの地域でも、自然はそれぞれの形で無限の恵みを与えてくださっているのです。

そのお恵みを頂きながら、私たちは自然の一部として生きています。自然とつながっているのです。そのことを自覚して生きていかなくて



はなりません。環境問題も他人ごとではないのです。

過去は過ぎ去つたものだから自分には関係ない、未来はどうなるかわからないから考える必要もない、今さえよければそれでいいという、現代に横行している考え方は、とても浅はかです。今幸せだからといって、それが永遠に続くことはありません。逆に、不幸だからといってそれも永遠に続くこともあります。何故なら、諸行は無常だからです。この世のものは、常に移り変わっているのです。

今といっているこの今も、瞬時に過去になっていきます。今がいいからといって、しがみつくとはいけません。固定的に見えるものも、安定して見えるものも、すべて変化を続けています。

この移り変わっていく世の中に於いて、いま、ここに、こうあるということは、無限の過去か

らの恵みによって成り立っているということ  
自覚する必要があります。そして、今の私たち  
のあり方が、未来に大きな影響を及ぼすことにな  
っていることも知っておかなくてはならない  
でしょう。

過去が良いとばかり言えないし、未来が明る  
いとも言えません。しかし、それなくして今の  
私達はあり得ないということも事実です。です  
から、過去を粗末に、未来を軽視することは、自  
分自身を粗末にし、軽視することになります。  
いま、ここで、私たちが日々怠ることなく生  
きることは、自分の命を大切にすることであり、  
それは同時に、過去も、未来も大切にすること  
であります。

そのような、過去、現在、未来にわたる縦の  
繋がりを大切にすることは、あらゆる横の繋が  
りをも大切にすることであり、そのことによっ  
て、私達は正しい生き方を修めていくことがで

き、充実した命を表現することができのです。  
これが、仏教の世界観です。眞実をありのま  
まに受け入れていくことが大切です。

私自身も、この世界観に救われた一人です。

今から二十年前、私は山梨県甲府市にありま  
す小さなお寺の住職に就任いたしました。二十  
七歳の時でした。この頃は怖いもの知らずでし  
たね。今思えば、よくつとめていたなと考えれ  
ば考えるほどぞっとします。

そんな怖いもの知らずだった当時の私も、お  
葬儀の時にはいつもビクビクしながらつとめて  
いました。

葬儀は、その方の生きてこられた御いのちを  
表現しなければなりません。そのようなことが  
二十七歳の私につとまるのか、口にも、顔にも  
出しませんでしたが、大きな不安を抱きながら  
つとめていました。

住職になって二度目の葬儀は、とても辛い葬儀でした。お亡くなりになられたのは、当時二十四歳の男性。会社のマラソン大会に参加中、心筋梗塞で急逝されました。

その方の棺から離れることができず、号泣しているお母様のお姿をみながら、和尚としての力の無さを痛感しました。掛ける言葉が見つかりませんでした。

そのことがひとつのきっかけとなって、「もっと勉強をしなければ」と思うようになりました。

幸いなことに、私には周りに素晴らしい和尚様方がいらつしゃいました。その和尚様方について、いろいろなことを学び、少しずつ、和尚としての力をつけることができました。

葬儀に対する不安も徐々に解消され、和尚としての自信もついてきました。

学んでいる中で、私はある言葉に出会いまし

た。それは、江戸時代の我が曹洞宗の宗侶、天巖祖暁という和尚様が残された言葉です。

祖暁和尚がある日、亡きお師匠様の墓前の供養の導師をおつとめになりました。そのお師匠様というのが、我々の世界では今でも広く知られている高僧で、「徳翁良高」という方でした。恐らく、お弟子様も大勢いらつしゃったと思います。

そんな、兄弟弟子がたくさんいる中で、祖暁和尚はお経を唱える前に、お師匠様に一言、言葉を掛けられました。その言葉が、

「良高や、良高や、おらがのような、良き弟子もつて、さぞや嬉しかるらん……」

「良高や、良高や……」と、お師匠様を呼び捨てです。普通は考えられません。更に、「私が弟子でよかったですよ」と言われました。

決して、お師匠様を見下していたわけではありません。たいへん尊敬するお師匠様でした。

では、なぜ、そんなに尊敬するお師匠様に対して、そのような言葉を掛けられたのか、そこが大事なところですよ。

「私はお師匠様の教えのひとつひとつをものにしていきますよ。お師匠様の教えのすべてをわがものにしていきますよ。お師匠様のいのちをそのまま受け継いでいきますよ。ですから、お師匠様と私は同じですよ、ひとつなのですよ」。

そのような思いからの言葉だったのです。お師匠様からすれば、これほど嬉しいことはないですよ。自分の教えのすべてを、いのちのすべてを、相続してくれる弟子がいる。これ以上ないお師匠様孝行でしょう。

この言葉に出会い、私の葬儀に対する考えが変わりました。私は、葬儀の定められた時間だけが、葬儀のすべてだと思っていました。しか

し、その中で、故人様の御いのちをすべて表現することは不可能です。

確かに、目に見えるところでは、時間がたてば葬儀は終わります。しかし、私たち僧侶の中では、その方の葬儀は終わりません。

何故なら、私たちの葬儀とは、亡き方の御いのちを、只々不確かな異次元の空間にお送りするということのような無責任なことをしていません。その方の御いのちを、我がいのちの中にそっくり納め、共に生きていく。当然、納めた以上は、私の行いが、故人様を善くもするし悪くもする、そのような覚悟をもってつとめています。

ですから、私にとりましては、葬儀は終わりません。少なくとも、私が死を迎えるまでは続いています。私の生きざまのすべてがつとめだからです。

私も、ご当山の方丈様も、そのような覚悟をもってつとめています。それが、私たちの葬儀



のありようです。私たちは、いのちの相続をしているのです。

十一年前、私にとっては決して忘れることのできない、悔いの残るお葬式をつとめました。

亡くなったのは私の高校時代の同級生、しかも同じ時間を共有した親友でした。

その数年前、彼から「実は体調を悪くして、実家に帰ってきているんだけど、今度会えないかな」と、突然電話がありました。高校卒業後、彼は社会人になり地元就職、私は上京して進学しました。

彼が地元にいるときには、私が帰省した際にたまに会っていたのですが、そのうち彼は仙台に転勤となり、私はお寺に修行に行き、会う機会を持ってなくなっていました。

十年ぶりに会った彼は、見かけはおじさんになっただけでしたが、変わらず元気な様子でした。

その後、数回会い、元気になったということでも仙台に戻っていきました。

それから、しばらく会えない時期が続いたのですが、二年後、再び彼から電話があり、「いま山梨で仕事をしていて甲府にいるから、いまから行ってもいいか」と連絡がありました。

しばらくして、彼がやってきました。話を聞くと、仙台の会社を辞め、半年前に山梨に戻ってきて保険会社に就職したということでした。

久しぶりの再会に話も弾み、いろいろな話をする中で、将来の話になりました。

そこで私が「ヨレヨレの衣を着て、自分で縫った地味なお袈裟をつけて、「それでもいいからあなたにお葬式をつとめてもらいたい」そう言ってもらえるようなお坊さんになりたいんだ」と言うと、彼が「いいじゃないか。じゃあ俺の時にはお前がその格好でつとめろ」と言いました。



楽しい時間は過ぎるのも早いもので、彼がそろそろ帰ろうかという時に、彼が突然「実は、お墓を探しているんだ」と言い出しました。

「お墓？」と、私がおそらく驚いた表情で彼を見ていたのでしょう。

彼が笑って「違う、違う、俺のじゃないって。実は本家のお墓に、生まれてすぐに亡くなった妹の遺骨を預けてあるんだけど、本家から出すように言われてな。それで探していて、実家にも近いから、お前のおじいさんが住職している都留のお寺に求めたいんだけど、今度見に行ってもいいか？」と言いました。

当時、私の師匠が住職をしているお寺が山梨県の都留市にありました。そこは、私の生まれ育った場所でもあり、彼も何度か来たことがあるお寺でした。

「なんだ、そういうことか。そういうことから師匠には言っておくから、いつでも見に行っ

ていいよ。」と言いました。

すると、彼は笑顔で「サンキュー」と言っ  
て帰っていきました。それが、私が見た彼の最後  
の姿でした。

数日後、私は立ち会えなかったのですが、彼  
は両親と一緒にお墓を見に来ました。後から聞  
いた話ですが、彼はすぐに場所を決め、「ここ  
がいい!」と言ったそうです。そんなにあわて  
なくても師匠や彼の両親が言っても「ここが  
いいです!」と言って、その場で契約しました。

それから三回ほど、彼から「いまから行って  
もいいか?」と電話がありました。ちょうど  
県外に出ていたり留守をしていましたので、会  
うことができませんでした。

私も電話をしなればと思っていたのですが、  
忙しさにかまけて「またそのうちかかってくる  
だろう」と連絡を取らずにいました。

十一年前のある夜、私の携帯電話に、彼の実

家の番号で着信がありました。私はその時、そ  
の着信画面を見た瞬間、すべてを理解してしま  
いました。電話に出ると、彼のお母さんが泣き  
ながら、彼が亡くなったことを告げました。私  
は直ぐに駆けつけました。

明るく振る舞っていたその中で、彼はいつも  
たたかっていたのだな、辛かったんだろうな、  
頑張って生きていたんだなと、彼の顔を見なが  
ら、そんなことを感じました。

そして、親友でありながら、そのことが見抜  
けなかった自分自身に腹が立ちました。もう私  
の心の中は、後悔の文字しかありませんでした。  
なんで電話を掛けなかったのか、なんで会い  
に行かなかったのか、なんで、なんで、  
……自問自答しても、彼は帰っては来ません。  
どうしようもない虚無感に、私自身襲われてい  
ました。

そんな状態ではあったのですが、彼との約束

だけは果たそうと、当時、そのお寺では副住職の立場でしたが、師匠に頼み込んで、私が彼のお葬儀のおつとめをさせていただきました。彼の、当時三十五年の御いのちを、私の中にしっかりと納めたかったのです。

正直申しまして、私の中でその時のことはまだ決着しておりません。おそらく、今後もし決着することはないでしょう。ただ、私の中では彼は生き続けています。いつでも私を見ている。いつでも言葉を投げかけている。「そんなことで、大丈夫か？ 目標としている僧侶になれるのか」彼の姿、声がそのまま、残像ではなく、生きた彼として、私を励ましてくれます。あれから十一年が経ち、私は彼に励まされながら、成長できているような気がいたします。もちろん彼だけではなく、私がいのを納めさせていただいたすべての方々育てられていきます。感謝の言葉を述べても、尽きることはありません。

ません。決して一人ではできないことですから。

先ほど申しあげましたように、私たちの葬儀とは、亡き方の御いのちをそっくりそのまま納めていくことです。善くするも、悪くするも、私の行い次第ということですよ。

祖暁和尚のように、「私がつとめてよかったですよ」と、胸を張って堂々と言えるような和尚になること。いや、それでは不十分です。常に移り変わっていく世の中に於いて、「なつた」と思った瞬間そのことも変化していきます。ですから、「私がつとめてよかったですよ」と言い続けられる和尚でいること、また、「あなたに つとめてもらってよかった」と言ってもらえるような和尚でい続けること、日々怠ることなく生きることが大切なことなのです。

そのことは、私たち僧侶だけでなく、皆様にも同じことが言えます。亡き大切な方々の御い



のちをしつかりと納めて、嘘偽りなく、堂々と胸を張って、「私でよかったですよ」と言い続けることのできる生き方を、「あなたでよかったですよ」と言い続けてもらえるような生き方を、日々怠ることなく修めていただきたく存じます。

冒頭でお話いたしました水面の蓮の花のお話、私たちは別々の存在としてここにいるけれども、泥中の蓮根ではみんな繋がっています。国や、人種に関係なく、みんな同じ蓮根で繋がっています。そのような、横の繋がりがだけでなく、縦の繋がりが、亡き大切な方々とも繋がっています。

十一年前に亡くなった彼も、私と蓮根で繋がっています。私が納めたすべてのいのちも、蓮根で繋がっています。出会ったこともないたくさんの人々とも、たくさんいのちのちとも、蓮根で繋がっています。目には見えないけれども、

水面からは見えなけれども、間違いなく繋がっています。泥中の蓮根には、この世も、あの世もないのです。

そのように、私たちひとりひとりのいのちは、数えきれないほどのいのちの支えがあつて、今の自分があることを自覚して生きていくことが大切です。ですから、このいのちは尊いのです。

また、自分がそうであるように、他者も同様に尊い存在であることも忘れてはなりません。

水面に咲き乱れる蓮の花。その形は違えども、大きさが違えども、色が違えども、どれも決して比べることのできない、平等に尊いお互いである。そのことを自覚して、お互い、日々忘ることなく、過ごして参りましょう。

多くのいのちとの繋がりを感じながら……。



# 善光寺檀信徒供養塔

善光寺開創五十周年を記念して

歴代住職墓地区域に建立されました。



(詳細は146ページ)

## 開山忌

## 第三十二回

## 育英会辞令交付式



先代の思いに応え共に精進を誓う

善光寺開山忌並びに第三十二回育英会辞令交付式が平成三十一年二月八日午後二時より、釈迦殿で執り行われ、関係のご寺院、総代をはじめ檀信徒の方々が多数参列されました。

開山忌法要は、焼香師に本寺の光真寺住職黒田泰弘老師をお迎えして営まれ、開山棟庵白純大和尚、二世中興大圓武志大和尚のご遺徳を偲んで参列者一同が焼香し追善の誠を捧げました。

引き続き育英会理事の安藤嘉則老師（駒沢女子大学教授）による選考経過の報告。辞令交付式は黒田博志理事長の導師により行われました。今年度育英生に採用されたのは臨濟宗妙心寺派僧侶の朝雲諒師、モンゴル出身のツウデウ・ヒシゲジャルガルさん、曹洞宗僧侶の和田賢宗師、浅摩泰真師の四名。





朝雲師と浅摩師はアメリカ。和田師はチベツト（インド）への派遣。

開山忌御導師黒田泰弘老師は、育英事業を始めた大圓武志大和尚の願いを振り返り、「留学僧の中から世界の平和に寄与する方、人々を救う方々が必ず出て来るとの信念から育英会が始まった。我々も物心両面から援助していきたい」とご挨拶されました。

また、黒田理事長は「先代の思いに込めて、檀信徒の方々が毎食一口を減らして浄財を寄付してくださいとおかげで、育英会を続けてこられた。留学僧の皆さんは、先代の思いを少しでも頭の片隅に置いていただき、共に精進して参りましょう」と述べられました。

法要後は西有寺専門僧堂堂長の山口晴通老師の発声で乾杯、歴代の育英生もご随喜頂き本年度採用育英生とともに和やかに歓談のひとつきを過ぎました。



▲和田賢宗師



▲本寺光真寺住職黒田泰弘老師



左より＝ツウデウ・ヒシゲジャルガルさん、朝雲諒師、理事長、浅摩泰真師

挨拶に立った護持会会長山口義男総代が黒田理事長にエールを送ると、参席した人々から育英会の意義を称え、事業の更なる発展を望む拍手が沸き起りました。

第三回育英生島崎義孝師の推薦を受けロサンゼルス禅センターで修行される朝雲師は「なぜ米国の人が禅に興味を持つのか、また自分の修行との違いなどを学んできた」と抱負を語り、善光寺事務局で七年間務めている浅摩師は、タサハラ禅センターで修行するにあたり「西洋で最初に作られた禅の修行道場にて、仏教の素晴らしさを坐禅を通じて国境を越えたサンガと共に体感してきた」と決意を語られました。



# 善光寺旅行会

↳ 大雄山最乗寺・龍澤寺井伊谷宮・袋井可睡齋参拝



## 令和元年 団体参拝旅行

そよぐ風も夏めいて、若葉の緑が日毎に深みを増します。五月初旬、一泊二日で神奈川県から静岡県の諸寺を参拝する旅行会に参加させて頂きました。

### 【第一日目】

神奈川県内では西部に位置する、南足柄市にございます。道了尊で有名な大雄山最乗寺に拝登させて頂きました。

大雄山へは東名高速の大井松田インターを降りて伊豆箱根鉄道大雄山線の大雄山駅前を横切るとほぼ一直線に道が伸びていました。その山腹の町並みを抜け、登山道のように険しい参道を登って行くと、お茶屋さんが集まっているところに着きます。バスはここまでしか上がれず、

その先は徒歩か、普通乗用車になります。

私は徒歩で行きましたが、まだだいぶ距離がありました。しばらく歩くと広大な最乗寺の伽藍にたどり着きました。

伽藍は広場を囲む様に立っています。広場正面に大きくそびえ立つのは、書院と本堂。

本堂には御本尊の釈迦牟尼仏がお祀りしており、朝晩の勤行や山主老師が修行僧に対して説法をする場所です。

その他、事務所や台所などがある香積台、修行僧が日夜、坐禅弁道に励む根本道場である僧堂、御開山の了庵慧明禪師をはじめ、歴代住職をお祀りする開山堂が広場を囲むように立っています。

開山堂を左に進むとすぐに御供橋・結界門があります。この門より先は道了薩埵の浄域とい

われております。

そして門をくぐり、右の階段を上って行くと御真殿があります。こちらは当山守護妙覚道了大薩埵を御本尊に大天狗・小天狗が両脇侍として祀られています。朝晩の祈祷から日中の特別祈祷が修行されています。御真殿脇には奉納された大小の大きい高下駄があります。



御真殿からさらに奥へ進み、階段をずっと進んで行くと奥の院が見えてきます。しかし、私がお堂が見えたところで、最後の長い階段は登らず、引き返してしまいました。

こちらには十一面観世音菩薩が奉安されているそうです。この観音様は当山守護道了大薩埵の御本地（真なるお姿）といわれており、その脇にはお札や御朱印などを取り扱っている建物があります。

最乗寺は人里から離れた、修行するには最適な清浄な場所でした。道了様がこの山の上より私たちを見守っていて下さると思うと、とても有り難い思いが致します。

草木鬱蒼山色青  
別天浄域水冷冷  
幾重登段到真殿  
無絶願人尊者靈

草木鬱蒼山色青し

別天の浄域、水冷冷

幾重も段を登り真殿に到る

絶え無く人願う、尊者の靈

(文・漢詩 戸澤 洋太師)

## 【第二日目】

お参りを終えた一行は宿泊する浜名湖館山寺温泉に少し早めに到着。

すぐ近くには秋葉山館山寺があります。山頂に建つ高さ一六mの大観音はその優しいお顔立ちから「美人観音」ともよばれているそうです。バスガイドさん曰く、「最近では総理大臣の安倍晋三さんにも似ていると評判なのよ」。

それではと山頂目指して有志で山登り。言われてみれば口元がそうかなあ……。



二日目は袋井の秋葉総本殿萬松山可睡齋へ。宿からも近く、出発してすぐに到着。

境内は十万坪の広さをほこり、東海道随一の禪の修行道場です。その名前は徳川家康公に由来します。

可睡齋が「東陽軒」と称していた当時のお話。

住職、仙麟せんりんちうげん等膳和尚が、幼少の家康公と父を戦乱の中から救い出して匿い、その命を救ったことがあります。

後に浜松城主になった家康公は、当時の感謝を述べるべく親しく和尚を招きました。その席上で和尚はコクリコクリと無心にいねむりを始めました。家来たちは慌てますが、家康公はにっこりとして、「和尚、我を見ること愛児の如し。故に安心して眠る。われその親密の情を喜ぶ、和尚、眠るべし」と申されました。

それ以来和尚は「可睡和尚」と称せられ、後に寺号も東陽軒から「可睡齋」と改められました。

また徳川家康公の帰依を受けて、天正十一年（一五八三年）に東海四ヶ国（駿河・遠江・三河・伊豆「一部」）の僧録司そうろくし（寺院を管轄する役所のような所）となり大いに禅風を振りました。

花の寺としても親しまれている可睡齋ですがこの旅は牡丹祭りと百合の間の時期で、その為それ程混雑せずにお参りすることが出来ました。本堂では後堂老師よりご法話を頂き、雲水さんに案内されて奥の院へ。火防の神様、秋葉大権現様をお参りして般若心経を讀経。

その後、高村晴雲作の日本一大きいトイレの神様「烏枢沙摩明王うすさまみょうおう」の祀られている東司を参拝しました。





荘厳な空気に包まれて広い境内を巡り有意義なひと時を過ごしました。



お昼は東海道五十三次二十番目の宿場町、丸子宿で名物の「とろろ汁」を堪能して一路帰路へ。

天候にも恵まれ、事故もなくとてもとても楽しい一泊二日の旅行でした。

(文 種井 英雄師)

## 参拝旅行

### 参加者のおたより

横浜市 古賀孝子様

善光寺様の方々大変お世話になりました。今度は大雄山の旅行と聞き、四年半近く主人の病院に通い、何百回も乗降しても道了尊にはお参り出来ず残念な思いでいました。今年は三回忌ですので、ありがたく涙が止まりませんでした。体調も悪いのに皆様に助けて頂き、感謝しております。

善光寺様のご旅行に何回も声をかけて下さり私の人生のページに何枚もの温かい記録が！

この書面をお借りして誘ってくださった角谷様に重重お礼申しあげます。

善光寺ご住職様ありがとうございます。

横浜市 小泉孝子様

この度の旅行の写真を受納致しました。車中での参拝資料の詳しい説明は目と耳をしっかりと使い記憶に残りました。方丈様、役員の方々のお心遣い等々に感謝申しあげます。

年がいもなく歩数計は二万歩を超えてました。元気印を保ちたく思います。



本当に楽しい二日間でした。ありがとうございます。ご自愛下さいますように。

東京都大田区 齋藤貴美様

写真ありがとうございます。右足膝関節痛、第三腰椎圧迫骨折を患い、三ヶ月間は絶対安静、治った後も今迄のように重い物を持ち上げたり、背負ったりすると他の腰椎が圧迫骨折することがあると医師から注意があり、旅行に行けるかどうか迷いに明け暮れました。が、参加することに決断しました。

皆さまの温かい支えにより無事旅行を楽しみ事が出来、感謝感謝です。有り難う御座いました。

今回のお寺参りでは三寺とも立派なお寺で急な登り坂、階段が多く大変で手すりを頼りにな

んとか参拝することができました。横浜に帰り、菩提寺横浜善光寺様が平坦で気軽に参拝出来、一番だと思っております。



横浜市 福田道子様

恒例の旅行写真が届きました。前回、「善光寺様、次はどこですか？」とお便りしました。「今度は静岡デス」と。晴天に恵まれ、仲間意識も出来あがり、楽しい時間。帰宅が近くなると「今度は年二回がイイネ」なんて声も上がり、善光寺様が色々と企画を練り、どうしたら皆様が愉しく有意義な旅行になるかとご苦心の賜です。ありがとうございます。

只、御写真の中の人数が年々少ないですネ。次はお友達もお連れしたいと思えます。



横浜市 瀧澤道子様

旅行中は大変お世話になりました、  
又、写真をお送り頂き誠にあり  
がとうございました。皆様の笑  
顔素晴らしいです。

大雄山最乗寺奥の院で読経す  
ることが出来、感激でした。

龍潭寺は以前、井伊家の子孫  
にあたる友人井伊君に連れら  
れ、友人達と訪ねたことがあり  
ました。井伊君は二年前に他界、  
彼に代わり参拝致しました。

今、可睡斎の真言「オンピラ  
ピラ ケン ピラケンノウ ソ  
ワカ」を唱えることで、私の怒  
りの心を鎮めてくれています。

天候にも恵まれ、心ゆくまで  
富士山を眺め、楽しい有意義な  
旅が出来ました。心より感謝申  
しあげますと共に善光寺様のこ  
れからの益々の御発展を御祈念  
いたします。

横浜市 高原利二様

お写真をお送り頂きましてあ  
りがとうございました。参拝旅  
行の時は、住職様はじめスタッ  
フ御一同様、檀家の皆様には大  
変お世話になりました。

善光寺様とのお付き合ひも年  
浅いもので、今回の旅行会に参  
加して、より善光寺様とご縁  
も深まったように思います。

今後ともどうぞ宜しくお願  
いいたします。



先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も四十九巻を数えます。檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。一九九九年、先代方丈さまのインタビュがNHKラジオ番組で放送されました。

□心の時代□

## 留学生交流を支えて

——NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」——

黒田武志

十月十五日金曜日午前四時六分を回りました。

では、「心の時代」です。

今日の「ラジオ深夜便」の担当は山田誠浩です。

今朝は、横浜善光寺の住職、黒田武志さんに、  
〃留学生交流を支えて〃というテーマでお話し  
ていただきます。

黒田さんは、昭和十三年の生まれで、今から  
三十年前に横浜の現在の場所に、新しき寺、善  
光寺を建立し、十五年前から、〃海外留学僧派  
遣育英会〃を設立・運営しておられます。聞き  
手は金光寿郎かなみつしおさんです。

**金光** こちらの横浜善光寺さんでは、十五年ほ  
ど前から留学僧の方の留学、海外との交流を支  
援なさっていることですが、現在までの、  
最初からの経過というと、おおまかのところど  
うい感じになっていらっしやるのでしょうか。  
**黒田** 「横浜善光寺留学僧育英会」を始めまし  
たことは、第一に、私自身も三十年前にタイ国  
にも、そしてアメリカにも留学させていただき  
まして、帰国しましてこの寺を創りましたが、

世界中の方々にご迷惑をおかけしていろいろと  
面倒をみていただいて、この横浜にきましてか  
ら新寺を建立いたしました。当時、まったくお  
金がなかったのですが、現在は建坪も四百坪近  
くになって何とかやっておるわけですが、みな  
さまにそのお礼をしたと思います。

こうして現在いられることは、すべてみなさ  
まのおかげで、「何かみなさまのお役に立てる  
ことがないか？」と考えました。そこで、私が  
一番感激を受けたのは、やはり若い時代、知ら  
ない国に行つて勉強する中で、多くの方々に助  
けられて知らないことを教えていただいたこと  
なんです。

そして、今日あるのは、すべてその国の方々、  
世界中の方々のおかげと申しているんです。で  
すから、そのように、世界中に行つて若い方々  
に勉強してもらう、そして、世界からおいでに  
なつて何かご不自由があれば勉強のお手伝いを

したい、と、いうような思いが、この育英会を始めた一番の動機なんです。

しかし何分にも育英会の運営にはお金がかかります。どなたもよく私に質問されるのは、「いったいどこからお金を工面するんですか?」ということなんです。

私は、そのことに関しましては、ちょうど今年はお寺開創三十年目になるんですが、育英会を設立した開創十五年目の頃には、お檀家の数はおよそ千五百軒でした。その方々に、このように毎回お願いしたんです。

「私たちは毎日朝昼晩三度食事をいたします。その三度食事をするとときに、ひと口分ずつお食事を減らして、その分、善光寺に寄付をしていただけないでしょうか」と。

一家族、二人の方も四人、五人の方もいらっしやるでしょうが、一家族「ひと口分だけを善

光寺さんに、仏さんあげよう」と、そう思っていたら、一食につき十円くらいは節約していただけます。一日ですと三十円、一カ月ですと、大金ですけども、九百円。「それを善光寺に——仏さまに、ご先祖さまに、頂戴したい」と。

そのお金を私は、これから世界中のあちらこちらに行つて勉強したいという若い人達に、その頂戴し預かったお金をお使いただこうということで、基本的な一番大事な経済的な基本筋をたてて、そして、育英会を創りたいとみなさまにお願い申し上げたわけです。

それが非常に多くの方の賛同を得まして、最初はアジアを中心に、まず成功させようと思つておりました。しかし、当時日本人というのは、アジアとの交流を大事にしようというお考えの方が少なかったんですね。やはりアメリカ、ヨ



ヨーロッパ、そういうところとの交流を重要視する方が多いことを感じました。

そこで最初はアジアのタイ国を中心にしようと思っておりましたが、アメリカの方へも初期の頃から目を向けることにしました。と、いいますのは、アメリカには私の兄が創立し、そして私も修行した禅センターがありましたから、そこにも派遣しよう。

先ずは、私が修行したタイのワット・パクナムとの交流。次いで、アメリカの禅センターとの交流。この両国への派遣を軌道に乗せたら、次はヨーロッパへも広げていくことにしたので。こうして世界が一つになっていくことを願ったわけです。

いろいろとご批判やご意見をいただきましたが、ただいま、十五年を過ぎて、派遣国が十三カ国、受け入れが十カ国、関係国が二十カ国と、

多くの方々に喜ばれるようになり……との願いがかなっているわけです。

**金光** 人数にすると、延べ何名ぐらいお世話なさっているのでしょうか？

**黒田** ただいま資料の上では九十三名というふうになっておりますね……

**金光** 十五年間で？

**黒田** そうです。ただそこには資料にある以外にも何人もお世話した方もいらつしやるので、総数は百二十名ぐらいになると思います。

**金光** ほほお、そうですか！

受け入れられる方と派遣される方の割合はどの程度でしょうか。

**黒田** だいたい、今は半々ですが、七、八年前、前半までは派遣が六割、受け入れが四割ぐらいでしたね。

**金光** では、ほぼ概略はうかがって……。

それでは、そもそも住職さんが、なぜそういうことをやろうと思われたか？——これはもう、お若い頃からのご自身の体験を踏まえた上でそういう道を進まれたんだと思われませんが——学校は駒澤大学をお出になられて、随分「僧堂」とか托鉢とか体験ご指導なさっておられるようですね。

ちよつと、その若い頃からの仏教に対するお気持ちから聞かせていただけますか。

**黒田** はい。私は大学院を終わりましたから、最初總持寺に安居いたしました。やはりなんといつても、我々には僧堂の生活、修行が大事。そして修行する場合には、必ず「素晴らしい師にいろいろ教えていただくこと」ということが私の基本的な考えです。

素晴らしい師匠にめぐり合うことはなかなか難しいのですが……。

まあ、私はそれで大学院を出て總持寺に行っ

たわけですが、大学院を出ているとかなり優遇されるので、半年の修行で「正教師」という資格を得て、次に永平寺に修行に行きました。

永平寺に行く前に、先ほども申しましたように私の次兄がアメリカで禅センターを開いておりましたので、そちらに行きたいと思っておりました。

先に話しました様に、私の兄は四十年前に開教師として留学をして以来、亡くなるまでアメリカで暮らしておりました。

私は若い頃兄に「私もいざれアメリカへ留学したい」と頼んでおりました。すると兄から、「それなら坊さんになれ」とすすめられ、言われるがまま駒澤大学大学院に進みました。やっと卒業してもう一度兄に頼みましたが、「ちゃんと修行してから来るように」と言われ、總持寺へ。

總持寺へ半年行きますと資格がもらえますので、改めて兄に頼むと、「おまえ、半年ぐらいの修行で何になる。永平寺へ行け」と言われ、そこで永平寺に行つたわけです。しかし嫌々ながら修行しているのですから、うまくいくわけがない。そのうち、痔を患つて——寒いですがから——最初は我慢しておつたんですけど、なかなか体調が戻らない……

**金光** なにか、「延寿堂<sup>えんじゅどう</sup>」というか、病氣の修行僧が入るところへ入れられたとか。

**黒田** ええ、そこへ入つたんです。……痛くてどうしようと思つて延寿堂に入ると、待遇がいちいんですね。お風呂も、まだ誰も入っていない、皆が入る前に入れてもらえたり、その他も非常に優遇してくれる。しかし、最初の三日、四日はよかつたんですが、一週間も過ぎてきますと「こんなことしては修行にならないから帰ろう」と思えたわけです。

そこで上の方の、老師に相談しました。ところがその当時は、大学院を卒業した者が何人もいて、永平寺で修行するということは今後の体制としては非常にいいわけですね。だから帰らないで少し我慢するようお願いされたのですが、私は、それでは私の「良心」に反するということで、帰らせてほしいと言つたんです。

しかし、帰ると言つてもお金がないんです、一銭も。ですからある友人から千円を借りて、永平寺を出たんですが、千円だけではとても東京まで行けない。電車賃を払つてごはんを食べたら幾らも残らない。そこで、そのまま午後いつぱい市内で托鉢をして、夕方寒くなつて駅に戻りました。この「応量器<sup>おりのようき</sup>」に半分ぐらいお金を頂戴して、持ったまま駅に着いた。するとすぐに電車の発車のベルが鳴るんです。見るとホームの右に東京行き、左に直江津行きの二本の急行電車が同時に入っていて、駅員さんに東



京、上野の方向に行くにはどっちに乗ればいいんですか、と尋ねると、「坊さん、乗ればすぐに行くよ」というので、慌ててパッと乗りました。

私は、名古屋を通過して東京に行くこうと思っていたんですが、手前の方の急行によく確かめもせず乗っちゃったんです。電車は走り出します。体はクタクタに疲れていましたが、持っていたお金を確かめると六百二十円。色々かき集めて

全部合わせても八百円くらいしなくて、……これでもこまで行けるかなあと、ぼーっとしばらく考えたりしていましたが、……ハッと気がついたら、私は富山経由の直江津行きに乗っていたんです。

**金光** 反対方向に？（笑）

**黒田** そう、反対行きに乗っちゃったんですね。それで、困ったということで、すぐに車掌さんに言いました。困ったなあと思っているところに、私が總持寺で修行していた頃の友人で、やはり駒澤大学を出ていて私より少し若かった松本君という友人が富山にいることを思い出しまして、寺の名前は聞いていましたので、訪ねることにしたんです。

夜の八時半に富山で下りて、寺に行きました。が、九時には「開枕かきちん」ですから、寺の中は真っ暗なんです。しかし、しょうがないから寺の戸をどんどん叩いて起こしたんです。中から「何

だこのやろう」というような声がするわけですよ（笑）。そして松本君が戸を開けて出てきて、「えっ、黒田さんか。永平寺にいるんじゃないかなったのか」と驚きまして、

「いや、調子が悪くて出てきたから、ちょっと泊めてくれ」といって、話をすると……。

「そうか、困ったな。でも、金がないなら、一日二日托鉢すれば、帰る金はできるだろう。」

富山は仏教国だから。明日から黒田さん、托鉢したらどうか」といってくれたんです。

次の朝、ごはんを食べさせていたから出かけました。九時ぐらいから、「ぎやーてーぎやーてー」と言つて、市内を一日歩いて、三時くらいに寺に戻ります。そしてお金をそっくり仏さんに差し上げて、般若心経をあげました。すると松本君が「黒田さん、ちよつと数えたらどう？」というので、いくらくらいかなと思つてご喜捨きしやを数えてみたら、八百円くらいある

んですね。二日だと千六百円になるし、三日目にはもう帰れるなあとと思つて、その夜も泊めてもらつて、次の日も托鉢して、千円近いお金を頂戴いたしました。

「では、私は東京に帰るよ」と言うと、「いや、せつかくここまで来たんだから、能登にある總持寺の祖院さんにお参りしてから帰つたらどうか」と言われましたので、その気になりまして、彼も、何かあつたら使えと三千円ほどのお金を貸してくれましたので、私は能登に出かけることにしました。

能登に行きましてからも、そのまま帰るのももつたいないものですから、そのまま「ぎやーてーぎやーてー」と言いながら、つつい日本を一周することにしたんです。

**金光** そのまま、托鉢で廻られたんですか。

**黒田** そうです。托鉢しながら日本を一周した

んです。

**金光** しかし、托鉢というのは、いつもいつも八百円とか千円とかもらえるものではありませんよ。全然もらえないときもあるわけですよ。

**黒田** そうなんです。最後の、京都あたりを歩いている頃は、雨が三日も四日も降って、誰も戸を開けてもくれない。相手をしてくれないような有り様でした。私はずっと草鞋をはいていましたから、歩き続けるとボロボロになってしまうんですが、草鞋を探すのも大変で、釣り道具屋さんでやっと見つけると十足くらい買ひこんでいたんです。

そして、腰から体中に草鞋を巻き付けて歩きました。次の町で草鞋があるかと探すのですが、とにかく雨が降ったり、雪道を歩いたりすると、びしょびしょになって、草鞋と体全体から馬糞の臭いがするわけです。ですから、誰も泊め

てくれませんし、ほかにもいろいろなことがありましたが、とにかく、三日間京都で雨に降られたことがあったんです。

**金光** あ、全然みいりなしで？

**黒田** そうそう。それでも托鉢僧は必ず、「涅槃金」といって、自分が不慮の死を遂げたときのための葬式代となる最後のお金を携帯しているんです。

**金光** ああ、行き倒れみたいになったときの後始末のお金なんですね。

**黒田** そうなんです。それを千円持っておったのですが、とうとうそれに手を出して食いつなぐほどの生活になっていました。

京都の知り合いを訪ねたんですが、私のずぶ濡れ泥だらけの姿を見て、本来なら助けてくれる立場の方さえも、驚いて、「今日はお客さんが来るから泊められない」と断られるほどでした。しかたがたないので、京都の町に出て、お

寺を訪ねることにしたのです。

雨はどんどん強くなるし、薄暗くなってくるし。暗くなつてからお寺に泊めていただくといふのは、大変失礼なことですね。やはり、ルールとして、三時前後の陽が傾く頃には自分の住処、今夜泊めていただくところを探して、そして陽が沈む前に荷を解いて、ちゃんと支度をして、お風呂を沸かすとか玄関を掃除するとか、お夕飯の準備をして、そして、お夕飯を頂戴して、朝早くお勤めをして失礼するというのが、約束事なんです。

しかし、これができないわけなんです。雨は降っているし、体は汚い。しかしそれでも、尼さんのお寺なら泊めていただけるかもしれないと思つて、ある臨濟宗の尼寺に行くと、庵主さん自身が出てきて、私の姿を見るなり「今日は庵主さんがいないから泊められない」というんですね。もう少し先に行つたら、四、五軒お寺

があるから、どこかに泊めていただけるだろうというので、そこへ行つたのですが、ダメと断られ、何軒まわつても断られたので、しかたなく私は京都の駅に行つて、どこか泊めてもらわなくちゃと思ひ、……五、六百円のお金はまだありましたので、……列車で亀岡というところに行つてそこで泊めていただける宿を探しました。

そこで、私を見かねて「泊まりな」と言つてくれる旅館が一軒だけあつたんです。旅館といってもほとんど木賃宿なんです、今から三十年前ですから、土間ですね。土間にいる私を見てご主人がかわいそうに思つて、「まあ、上がりなよ」と言つてくださつたんですね。

私の体は冷えきつていましたので、「お風呂に入れていただけませんか」と言つと、「いや、まだお客さんがたくさんいるから、風呂はいつ入れるかわからないなあ」とおっしゃる。これ

は、つまりダメだということですから、銭湯の場所を聞き、濡れた法衣のまま雨の中かなり長く歩いて銭湯まで行きました。

そして、ありったけのお金を持って出て、十六円払ってやつと温まって、その帰り、ルール違反ですが、一合のお酒を買いました。それが当時三十五円ぐらいだったんですね。それから十円のパンと十円のバターを買って、宿に戻って残った金を出すと、二十四円しかない。

とにかく腹がすいてますから、お酒を飲み、パンにバターをぬって食べながらじつと二十四円を見ていたら、「俺の命は二十四円か。俺はいったい、何をやっているんだろう」と思えてきたわけですね。しかたない、ともかく寝ようと思い、ずぶ濡れの法衣を脱いで廊下の方に干して寝て、翌朝三時。まだ雨が降っているんですね。五時になつてもまだ降っている。

それで、さて、どうしようと正座して考えて、

東京に電話して親父に金を送ってもらおうかとも思ったんですが、一、二時間ポーツと考えているうちに、

「俺は坊さんじゃないか。坊さんというのはただひたすらお経をあげればいいんじゃないか」

と、ふと思えてきて、宿を出る前に「ご先祖さまにお経をあげさせていただけませんか」と頼んだのです。

仏さまは三尺くらいの渡り廊下の向こうの離れにありまして、私はそこに通されました。「そこでお経をあげてくれ」というので私は歩いて行きました、精いっぱい般若心経を唱えてご供養させていただきました。「それではありがとうございました。これで失礼します」と言っ出て行くこうとすると、宿のご主人が、「雲水さん、腹減っているんじゃないかい」と声をかけてくださったんです。そりゃもう、何も食べ





てませんし、腹は減っていますから、ついつい「はい」と言うと、そこで初めてあったかいごはんを三日ぶりに頂戴いたしました。二膳いただきまして、三膳目もいただきたかったです。二膳いただきますが、それはやはり遠慮して、そして、ふたたび雨の中出て行ったのです。

頭にかぶっているのは網代笠ですから、じゃんじゃん濡れるし、一銭も入っていない応量器にも雨水がたまる。こんなにお金もたまればなあ、などと思っているうち、亀岡の郊外に出たとき雨がピタッとやんだんです。

ふと見ると女子高校の入口で学校帰りの学生たちが出てきたところでした。そこで一つ、この方たちのために般若心経を唱えようと思つて「ぎやーてーぎやーてー」と唱えていると、その学校の入口の横の家から三十歳ぐらいの女性が出て来て、とことと私に寄ってきて、十円のご喜捨をくださったのです。さらに唱え続け

ていると、出て来た女学生たちが百人近くバーツと集まってきたて、一円、十円とご喜捨をしてくださったんですね。

「私がもうダメだと思ったときに、命が甦ったような気がしたわけです。そのとき、三日間も出なかつた太陽が出て雲の切れ間から一瞬のうちにサーツと光が射したんです。

「人間は生かされている」

そうしみじみ有り難く感じ、私は生命を大切に、修行をやり直さなければならぬと思つた。そこが私の原点なんです。

そして、自分の体験を家族の前で「私はありつたけのことをやってきた。すごい経験をした。俺はたいしたもんだ」……みたいなことを言ったんですよ。

すると、十年ぶりにアメリカから戻っていた次兄は、「そうかそうか。えらいもんだな」と

言ってくれたんですが、

長兄は、「おまえ、そんなにいろんなことしてきて、一体おまえに何があるんだ。おまえには何もないじゃないか」と。

それでハツと気付いたんです。——自分に何も無いことを！

それで、修行のやり直しだということで、あらためて總持寺に行って僧堂に入りました。それから、これからは何をしようかと考え、本当の仏教とは何だ？ 自分は何を学ぶべきか？ 考えたところから私の新たな人生が始まったのです。

**金光** それからインドへ渡られたんですか？

**黒田** はい、そうです。その後、總持寺で四年間修行のやり直しをいたしました。それから、インドやタイ国といった仏教国では、仏教の教えがどのようなになっているかを知りたくて、そ

これらの国々に渡ることを決心しました。

そして、インドの仏跡を巡拝したあと、タイ国のワット・パクナムで修行をいたしました。

タイのワット・パクナムでの修行は、「二二七の戒律」を守る修行です。

その後はアメリカに渡り、ロサンゼルス禅センターでアメリカの方々といっしょに坐禅修行をいたしました。

それから、寺もお金も何もない日本に帰ってきたのですが、大阪のナリス化粧品という会社が私を助けてくれて、一千万円の寄付を——三十年前に社員一千人から月々三百円ずつ集めて下さって——私は三百円ではどうだろうかと実は不安だったのですが、み仏の力ですね。

担当の東郷さんというお方が「先生、たいへんなことになったよ。お金集まり過ぎて、今、七百五十万にもなっている。先生いらんよ



1972年4月3日 ナリス化粧品成寿殿竣工式にて

な」と言うんです。

私は、「いやあ、もうお金は決して無駄にいたしません！」と言って一千万円のご寄付をいただいたので、この横浜善光寺を建立したんですね。それで、そのあと、五カ年計画で千軒の檀家さんになっていただこうと発願したんです。

そのうち檀家さんも千五百軒になったので、皆様のために釈迦殿を造ろうと思ったんですね。ところがお金は一銭もないのに、総工費は相当かかるという。そこで私はその時銀行にかなりの借金をしました。

「何でも使え」と言われ、他にはないという仏像も入れました。檀家の方も協力してくださいって、全部決裁して、それで借金が残りしましたが、それも十年くらいかけてお返ししていけばいいかなと思つて、釈迦殿を建立したんですね。私自身は一銭もないところから、これだけのものができたということで、すべて皆様のお蔭

であり世の中に還元しようと思いました。

そこで何を考えたかというところ、自分がかつて世界中の方にお世話になってきたから世界中にそのご恩を返したい、と。すべての方々に、自分の出来る限りのことをしたいと思ったんですね。

何をするにも、最後は「人材」だと確信しました。

「何をするにも、先生、人材が集まっていれば、人事に成功すれば八割はもう何かを行う前に成功する」と言っていたとき、それなら世界に通じる心を持つ人材を育成すれば、日本は永遠に滅びない、永遠に栄えていく、ということ、留学僧派遣育英会を創り出したということが、私の単純な話なんですけれども。

私の誓願は皆様に救われ助けられ、仏さまに救われてきた。そのご恩を皆様に戻そうということが私の今日の育英会設立の動機であり、私

の人生観の基盤になっているし、私の願いなんです。

すべて皆様に助けられ、今日の私がある。皆様のおかげだということをいつでもお話し上げたいわけなんです。

**金光** ま、今、世界中のお世話になってきたとおっしゃいましたけれども、例えば、タイの寺院でご修行にられましたね。一種の悪口になってしまいかもかもしれませんが、タイの仏教などは日本とはだいぶ違って、お寺の中だけで自分の悟りをひらく、ということ聞いたことがあるんですが、あちらの寺院でのご修行というのはどういう印象をお持ちになりましたか？

**黒田** ええ、まあ、向こうはですね、生ぬるいようなところもないことはないのですが、しかし「二二七の戒律」を守るといって、戒を守るということが一つのベースですからね、戒律を守らな

ければもう宗教ではないです。

日本の場合は戒律がなくなっていますから、私はやはり、戒律はなくてはいけない、守らなくてはいけないものだと思います。それと同時に、日本と比較したなら、日本がよい悪いということではなくて、タイの場合は僧侶の方々が心から民衆の方々に尊敬を受けているんですね。これは日本では考えられないほど、タイの僧侶は心から民衆に尊敬されている。

熱心な仏教国ならこそ、一つの仏教施設建設にしても、日本とは比較にならないほど壮大なプロジェクトとなるのです。

例えばタイ国に仏教がはじめて伝来したところといわれ、古くから仏教の聖地として知られるバンコク西部のナコン・パトムという町に建てられている「ブッダモントン」という仏教公園があります。そこは仏紀二五〇〇年を記念す

る事業として一九五五年に、プミポン国王が自ら定礎を主催し、国政府と国民が一体となって建設が始まりました。途中、工事が中断されることはありましたが、仏紀二五〇〇年を迎える二年後までには完成の予定で今もお建設は進められています。

すでに中心となる仏陀像や主要施設は完成しており、およそ二・五キロ四方の広大な敷地の中心部に、シンボルである遊行仏陀像が建ち、その周辺に四つの記念堂、会議場、図書館、宿泊施設、瞑想ホールなどの建物が点在しています。まさに、今世紀最大の仏教遺産と言っているでしょう。

この施設の中に、その中でも極めて重要な意味を持つ『南伝大蔵経』の経蔵があります。これは私も若き日に修行したワット・パクナムの偉業であり、十年の歳月をかけて昨年の秋に完成いたしました。

もちろん私も、善光寺の機関誌『成寿』でもご報告している通り、できる限りの協力を続けて参りました。

この、二十世紀最大の仏教遺産の中の最も重要な位置を占める『南伝大蔵経』というのは、縦二メートル、横一・一メートル……障子一枚半ぐらいの大きさの大理石の板碑七〇九基、表裏合わせて一四一八枚分に、経・律・論の三蔵を、ワット・パクナムの僧侶たちがパーリ語で一字一字、精根こめてすべて手で彫ったものなのです。

七〇九基の板碑が壁のようにずらりと並ぶ経蔵内部は、外からの強い日差しが遮断され、涼しい風が流れ、全体に崇高な空気に満ちた空間です。欄干の部分には、釈迦の前世の物語であるジャータカ物語や現代までのワット・パクナムのご住職の歴史、僧侶と国民が心を一つにして経蔵建立に取り組む姿が色鮮やかに描かれて

おり、その場にいると、手を合わさずにはいられない気持ちになります。

こんなにもすばらしいものが、十年という月日でできてしまうというのが、タイのとてつもないエネルギーなんです。日本では百年かかってもできるかどうか。いえ、お金さえ払えばできるんでしょうが、無償で人々が動くという信仰の篤さ、エネルギー。

台湾も韓国もそうですが、たいへんな力が民衆の中からお寺に燃え上がって生きているというような感じなんです。

日本の場合と比較すると、日本はお寺というと観光的な気分で見ている人もいるし、既成の教団に対するいろんな思いもあります。私は、あちらの方は仏教が現代に生きているのを感じますね。



タイにて修行中の先代方丈さま（左）

それはお坊さんたちが厳しい戒律を守るからですよ。それは、戒律を守ることによって民衆の心に偉大な力を起こし、戒律を守ることによって逆に民衆の力が結集して燃え上がる、というより、はかりしれない爆発的なエネルギーになっているというのが、タイではないかという感じをうけているんですね。

**金光** そのエネルギーの中心になっているのが仏教ということですね。

**黒田** 仏教ですね。なんといっても僧侶が中心となつてね。中には力のないお坊さんもいますが、しかし民衆たちは自分たちもお坊さんになつて二二七の戒律を守るでしょう。だから大事にせざるを得ない。しかし今は比率は半々。

私が昔修行に行っていた頃は、民衆の八割くらいがお坊さんになりました。今は十人のうち五人くらい——半分はアメリカ、ヨーロッパに



勉強に行ったり、政治的に出世しようという方も出てきました。今は、お坊さんはただお寺にいなさいというのではなく、田植え仕事もやろうという新しい仏教がね、芽生えていますよ。

何十万人という人が坐禅してね。その人たちがすごい力でタイ国を動かそう、世界を動かそうというように、どこにまで来ていますね。だから日本の既成の教団の人たちが、「俺たちは大乘仏教で、向こうは上座仏教だ」なんて壁をつくるようなそういう時代はとうに終わった、そういうことを強く私は感じてますね。

日本の僧侶の方々ががんばってはいるんだけど、もつともつと力を合わせて、今何をするか、を考えてほしいと思うんですね。

今、大事なことは何かというと、五年先、十年先ではなくて、今、何をするのか、どうしなればいけないのか、ということをもう一度冷静に考えなければいけないということ。それが、

宗教家の本當の命だと思う。

するとどうやることは決まってくる。生きている、とはどういうことか。生きていることは、多くの人々の役に立つことです。悪いことなんかできない。それが釈尊の命だという、そこをね、私は道元禅師の立場でお話するけれども、しかし、他の宗教もみな、同じなんです。

道元禅師だって、私は曹洞宗だ、なんて言ってます。日本の仏教は、世界を指導し、世界は仏教の救いを求めている——キリスト教だとかマホメットだとか、そういう隔たりをつくるのではなく、みんなが、心から「ああ、そうだ！」と動かされるものが宗教であると思うから、もう一度原点に——私たちはない力をふりしぼって、皆様の力を結集して、世界を動かしていかなければダメだということが、私の強い誓願なんです。

**金光** タイの他にアメリカの禅センターにいらつしやつたこともありますが、ここでは指導をなさつていたのですか。

**黒田** 向こうの人たちは一生懸命なわけですよ。

**金光** アメリカの方たち？

**黒田** ええ、日本の人の多くは仕方なしにやつてるんですよ。……結論言っちゃうと。

向こうの人たちは、好きでやつているわけですよ。全然レベルが違うわけです。概して、坐禅をするような人はプライドの高い人が多いんです。俺は何年坐つた、というような。それは大事なんだけど、自分が本当に救われなければダメなんです。それが根底。ですから、最初にも申しあげたように、いい師匠に指導していただければだめなんです。

アメリカの場合には、百年、まだ、アメリカに仏教が伝わってから百二、三十年。鈴木大拙

先生が最初に『大乘起信論』を翻訳されたのが二十四、五歳の頃。禅の言葉は百数十年前から知識として入っているんですよ。アメリカには。しかし、正式にそれがどういふものを説ける人がいなかったんです。それだけなんです。

それを戦後、曹洞宗とか臨済宗とか、私の次兄・前角博雄老師とか、鈴木俊隆老師、片桐大忍先生、そういう方々がアメリカと密着してこの三、四十年くらいで完全に定着させたんですね。わかりやすく。安谷白雲老師や宇坂光龍老師といった方々が非常にわかりやすく説いた。

例えば、日本の場合では、臨済禅とか曹洞禅とかの比較などはなかなか言えない。しかし、そういう単純な質問に、——私もアメリカにいるとき、そういう先生の脇にいましたから、聞いていたのですが——、先生はどう答えるかという、日本の本に書かれているかどうかは別として、

曹洞禪というのは春雨で、  
臨濟禪というのは吹雪です。

そういう表現をしたんですね。

それを兄が訳しますと、アメリカの方はわからないようにもわかるんです。フィーリングとして。違うように見えて、同じ「水」じゃないか、と。なぜ違うというのか、本質は変わらないじゃないか、と。アメリカの人にはそういう上手な説明をするとすぐわかる。

日本は「ただ坐るんだ」とか、「只管打坐<sup>しかんたぎ</sup>」とか言うけど、じゃあ只管打坐とは何かって、私は言うんですよ。アメリカ人に教えられるような表現ができるいい指導者が日本からほとんど出て、世界の中に入って行ってほしい。英語がわからなくても、カタコトでも、日本語でも、一生懸命説明すれば、自然と——心ですから——そんなことは、アメリカでは三十年以上前からやっているんだから、日本はもつとしつか

りしなくちゃだめだ、と思いますね。

アメリカでは本当にいろいろな点で違っています。自給自足ですから。我々が正当に評価しないと。禪堂といったって馬小屋を改造したものだし、私たちがつくった禅センターは歯医者さんの家だった民家を買ったもの。柱だけ残して、そこで坐禅しているんですから。形にこだわらないんです、日本みたいに。形でなく、心を説くことをアメリカの方が先にやっているんです、これはもうまったく日本は遅れている。

しかし、日本もほめるべきところがありますよ。福井の発心寺さんとか、四国の瑞応寺さんとか、日本でもがんばって外国の方を受け入れているところはたくさんあります。日本にもそのような世界に開けてはいるんですが、アメリカでは十五カ国ぐらい来て「摂心<sup>せつしん</sup>」やっているんです。私もそこにいましたが、うちの育英会

の留学僧も出し、私も坐禅していて世界は一つと感じましたね。

**金光** やはりそういうところで生活し、生きた禅の修行をしている方の側から交流しなきゃいかんと？

**黒田** ええ、そこが私の原点でもあるわけなんです。やはり、〃人的交流〃これをしなければ世界はだめだ、というのが私の心です。だから私はどんどん若い人々に外国へ留学してもらい、また、受け入れられるのならば多少のことなら何とかしてさしあげたい。

そうした人的交流——世界を結ぶには人材の交流以外にありえないと思っています。だから、どんなに自分が苦しくとも、どんなことがあっても、実行しなければと思っっている。言うことはだれでもできる。世界中の人がいろいろ言っているけれど、実践しなければ。そのためには、命を投げうって、裸になつて尽くしていきたい。

それには、何も無い方がいいと思っっているんです。

**金光** それが、こちらの横浜の善光寺さんができて、たしか今三十周年ですね。三十年たった現在でのお気持ちということになるわけですね。どうもありがとうございます。

『留学生交流を支えて』——お話は、横浜善光寺の住職・黒田武志さん、聞き手は金光寿郎さんでした。

註 NHK第一ラジオ放送 平成十一年十月十五日放送「心の時代」より収録・加筆



# 一 齋法要のご報告

【平成三十一年】

○新年祈祷会 一月九日

新年祈祷会では、毎年福引を行っています。福引は、西暦七百年ごろに聖武天皇が正月に布などを景品として短冊を引く余興を行ったのがはじまりと言われております（諸説あり）。当たった人も、外れた人も、皆で年の初めを祝い、楽しんで過ごした歴史がこの行事には詰まっているようです。

毎年来ている方も、初めてご縁を頂いた方も、老若男女、笑顔で和合している姿に、本尊のお釈迦さまも微笑んでおられるように見えました。奉納演芸には今年も和太鼓大元組、川島囃子保存会の皆様が来てくださいました。

## — ニュース・アラカルト —



○節分追儺法会 二月三日

五十年前、善光寺が初めて務めた一斉の行事がこの節分追儺会でした。本寺の光真寺様より枡をお借りして、不動殿にて少人数ながらも熱気溢れる豆まきが行われました。

今では三百名を超す方々が集まり盛大に行われます。恒例の掛け声は、住職による、「シャンシャンシャン、オシャシヤのシャン。」「福は内、福は内。」奉納演奏をして下さった大元組さんも豆まき係をとめていただき、会場一つになって豆まきを行いました。



— ニュース・アラカルト —



## ○春彼岸法会

法話 栃木県高德寺副住職 渡邊清徳老師  
御詠歌教室の講師、渡邊清徳老師による「仏教徒の心がけ」と題してのご法話。

『修証義』第四章にも示されている四摂法の教えを説かれた「四摂法御和讃」を一緒にお唱え致しました。その歌詞の意味を解りやすく説明して頂き、み教えが自然と心に沁みわたりました。仏教徒として清々しく生きることを学びました。

また山口護持会会長より二月に行われた育英会辞令交付式の報告がなされ、第三十二回生として育英生に採用された四名のうち、当日法要に随喜された和田賢宗師と浅摩泰真師のお二人が紹介されました。お二人は檀信徒の皆さまに對して育英生に採用されたことのお礼と今後への意欲を述べ、決意を新たにされておりました。

(一)法話は72ページをご覧下さい

## ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

## 【令和元年（改元）】

### ○孟蘭盆施食法会

法話 当山住職

令和最初の一斉法要。多くの方々がお参り下さり、住職より孟蘭盆や施食の解説、布施行の大切さをお話しいただきました。

(一)法話は56ページをご覧下さい

### ○秋彼岸法会

法話 大本山永平寺別院長谷寺維那

山梨県長泉寺住職 水庭浩章老師

水庭浩章老師による「いのちのつながり」と題してのご法話。

蓮の華と蓮根を喩えにいのちの在り様を解りやすくお話下さいました。

水庭師は昨年より日曜坐禅会で正法眼蔵「現成公案」を提唱して下さいます。

(一)法話は84ページをご覧下さい



○身代不動明王大祭 五月二十八日

御祈祷前の奉納演奏、今年は毎年恒例の米陀麻美さんによる繊細なフルートの音色に加えて、声楽家井上由佳さんによる伸びやかなソプラノ。そして、二人を支えながらも軽やかにメロディを繰り出すピアニストの木村友美さんによる重奏でした。

会場の皆様も心踊らせ法要前のひと時を楽しみました。



— ニュース・アラカルト —



## 震災義援金の御礼

天災は忘れた頃にやってくると古い諺にはありますが、ここ数年は忘れる間もなく次々に自然災害が起きています。

被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げますと共に、皆さまの安心と一日も早い復興をお祈り申し上げます。

檀信徒の皆さまよりお納め頂きました尊い浄財、護持会費の一部を四月九日、住職と山口義男護持会会長が神奈川新聞厚生文化事業団を訪れ日本赤十字社へ寄付致しました。

今後ともご理解とご協力の程宜しくお願い申し上げます。

## ニュース・アラカルト

### 青年会活動報告

令和元年七月に住職と有志の方々で富士山に登りました。登山ガイドさんと共に歩を進め、頂上に到達した際の達成感は忘れられないものでした。雨の中、そろって無事下山することができました。参加者の皆様ありがとうございました。

(富士登山レポートは150ページをご覧ください)



## 開基家の墓前に報告

開創五十周年記念式典を前に、住職と倫子ご母堂が大阪の株式会社ナリス化粧品本社にご挨拶に赴かれました。

次いで当山開基である村岡満義様の墓前にお参りをし感謝報恩の誠を捧げられました。

先代様と開基様が出会い、縁が結ばれ半世紀。その縁が種となり大輪の花を咲かせて今があります。「そのご縁に感謝を致し、更に先代様が掲げられた理念を今後も継承して参る所存です」と、住職は気持ち新たにお願いされて来られました。

## ニュース・アラカルト

### 善光寺の蓮

梅嘉庵前にある蓮鉢から今年もたくさんのお蓮が咲きました。





## 檀信徒供養塔を建立

開創五十周年を記念して歴代住職墓の一面に善光寺檀信徒供養塔が建立されました。

これは、先代様が「善光寺が今あるのは全て檀信徒の皆様のおかげである」といつも博志方丈に伝えていた事を形に表したものだ。

九月四日、総代会に合わせて開眼供養が執り行われました。

高台より善光寺を見守って下さっている先代様。その隣に立つ檀信徒供養塔。二基の並んで建つ供養塔をお寺からも拝することが出来ますが、ぜひ足をお運び頂いてお参りをしてみて下さい。高台から手を合わせお寺もお参りすると更に清々しい気持ちになります。

— ニュース・アラカルト —





このお袈裟は遠藤会長が亡きご子息の供養の為に  
般若心経を墨書し奉納されたお袈裟です。



平成26年 不動明王大祭にて尺八の演奏







善光寺青年会

## 霊峰 富士を直指して

青年会会長 鳥居 悟



平成から令和となり善光寺開創五十周年という節目の年を迎えるにあたり、青年会では住職をはじめとして有志を募り、令和元年七月十日、

十一日と富士登山を行いました。

安全を考慮した結果、登山ガイドを依頼し、ルートを選定、時間配分を計算しての『0泊2日』。

今年山頂手前の石垣が崩落し、登山道が閉鎖され

ているという中、幸いにも、出発当日の昼間に開通。ルートが確保された事もあり、予定通り十日午後十一時に善光寺を出発。車中泊で翌十一日午前二時に富士山五合目に到着。ここで二時間程の時間調整。仮眠を取る事になりましたが車中では中々寝られず、午前四時前に登山ガイドと共に富士登山開始。

暗闇の中を、ヘッドライトの明かりと先導するガイドを頼りに、まずは六合目を目指します。天気は薄曇りではありましたが、既に、東の空は明るくなってきており、四時半過ぎに六合目で、運よく御来光を拝むことが出来ました。

御来光を拝めた事もあり、一同の登山に対するモチベーションも自然と上がります。それでもそのはず、明るくなった事で、手に届くほどの距離に山頂が見えています。ですが、ここから本格的な登山が始まりました。ガイドの指示に従い、呼吸法と歩幅に気をつけながら、ゆっく

りと足場の悪い登山道を上がって行きます。

早朝、しかも山開きから数日後ということもあり、登山道を行くのは私達だけ。自分たちの歩く音だけが聞こえる静寂の中、ゆっくりと一歩一歩、頂上を目指します。標高が高くなっているとはいえ、まだ二千メートル。空気もそれほど薄く感じる事もなく、道中の山小屋休息時も笑顔で談笑をしていました。下を見下ろせば、雲海が広がり、丹沢の一部が見えるほど。景色を楽しむ余裕もありました。



七合目に向かう頃には、岩場も広がっており、一歩踏み出すたびに呼吸が乱れて行きま

メートル。急勾配の為、右へ左へと歩く距離は長くても、実際に上っている距離はそれ程でもない事実には、心が折れそうになります。それでも励まし合いながら、「まずは八合目の山小屋まで」と、休み休み登って行きました。

ですが、さすがに標高三千メートルを超えた辺りから体に異変を感じてきます。肉体的疲労はそれなりにありましたが、動けない程の疲労感ではないのに足が止まります。酸欠です。呼吸をしても、体に必要な酸素が入らず、体が動かない。何度も深呼吸をしながら、一歩、一歩と足を前に押し出します。ガイドが先導しながら色々と説明してくれますが、話が全く頭に入りません。

八合目の山小屋に着いて、朝食兼昼食を頂きます。いれて頂いた温かいお茶の有り難かったこと。この八合目の山小屋で、体力的な理由から一名が登頂を断念。無理に登って事故になる



よりは、山小屋で休んでもらい、下山時に合流する事としました。

一時間程の休憩をして、ここから残り二時間。山頂を目指します。

山頂はすぐ目の前。テレビでも馴染みのある風景がそこにあります。先が見えない所ではなく、歩けば頂上に行ける。

目的の場所が見えている。辛くても登れば達成できる。登山経験もない私たちが一歩踏み出す事で、頂上が数センチ、また数センチと近くなる。そう思い最後の気力をふり絞って登って

行きました。

しかし山の天気は変わりやすく、登頂を目前にして雨に見舞われます。雨具を着て残り数百メートル。そして遂に富士山頂上に到着。令和元年七月十一日十二時でした。

この達成感、人生四十五年の中で間違いない最高の達成感。登山経験もない私達が日本一の山の頂に立てたのは、奇跡でもなく、一緒に行動した住職をはじめ、参加者の方達が共に励まし合い、互いを信頼していたからこそ出来ただと思っております。

あいにく天候が悪く、また時間的な制約もあり、頂上でお経をあげる事は叶いませんでしたが、住職と共に、心から手を合わせ、善光寺檀信徒皆様のご健康はもとより、自然災害に遭われた被災者の方たちへのご供養をさせて頂きました。

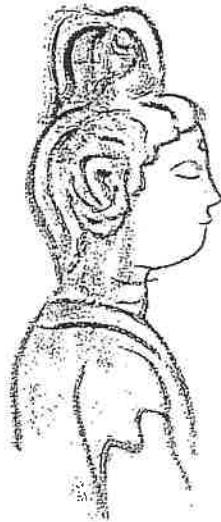
登り切った高揚感も束の間、登ったというこ

とは、当然ですが下山が待っています。今回の登山で正直、一番きつかったのはこの下山でした。登るといえるのは、ある意味、目的がありませんから、自分の中のモチベーションが保てません。登った達成感を頂上で得た今、下山というのは、モチベーションも無くなり、先の見えない下りルート。足場は柔らかい砂地。下っても、下っても同じ景色。これが五時間。

雨は降り続き、汗なのか雨なのか、全身ずぶ濡れ。会話も全くない状態で午後五時。やっとの思いで五合目駐車場に辿り着きます。ガイドにお礼を言うと、みな足早にバスに乗り込みます。前夜と異なり、車中ではみな気持ちよさそうに寝息をたてていました。午後八時半過ぎ、無事お寺に戻りました。

途中から天候が悪くなってしまうましたが、皆さんに「良かったです」と言っていたいただき、企画させて頂いた甲斐がありました。参加され

た有志の皆様、本当にありがとうございました。  
お疲れ様でした。



# 善光寺霊園ニュース

## 横浜やすらぎの郷霊園

豊かな自然環境に恵まれた横浜やすらぎの郷霊園は善光寺が直接管理運営している公園型霊園です。いつお墓参りに来てもほっと心やすらぎ、御霊と語りあえるそんな霊園を目指して管理しております。どうぞ、ごゆっくりお参り下さる。

### ◆やすらぎ通信 51号より

#### ◆お正月さま 〳年神さま・歳徳さま

一年のはじめを祝うお正月。お正月は、新しい年の実りをもたららし子孫の繁栄を見守ってく

れる神さま（お正月さま、年神としがみさまとも歳徳神としとくじんさまとも呼ばれます）を各家にお迎えする行事です。年神さまは祖霊神であり田の神、山の神でもあります。その神さまを家に迎え入れ、お祝いし幸福を授けてもらうために様々な行事や風習が生まれました。大切なお客さまをお迎える「おもてなしの心」が表現されています。時代の変化にしたがい風習も変わっていきますが、代々受け継がれている「おもてなしの心」をみてみましょう。

お正月の「正」には、「年の初め」「年があらたまる」という意味があります。「新魂あらたまの年のはじめ」という言葉があるように、「たましいが若返り、新しくなる」一年のはじめの月という意味にもなります。以前は数え年といわれ、

誕生日ではなく元旦に皆一斉に歳をとりお正月を祝っていました。一月を睦月と呼ぶことも家族睦まじく年神さまをお迎えすることに由来します。

お正月に食事を頂く際には「祝い箸」を使用します。長さ八寸は末広がり縁起よく、「両口箸」とも呼ばれ両方の先端が細くなっています。それは一方は年神さま、もう一方を人が使うためです。年神さまへのお供えをお下げして食べることで一年の恩恵を授かる意味があるそうです。また、丈夫で折れにくい柳の木を使用することから「柳箸」とも言われます。

年神さまをお迎えする目印として玄関に「門松」をたて、「しめ飾り」を飾ります。しめ縄で作られたしめ飾りは年神さまをお迎えする清浄な場所を表し、古い年の不浄を清め、災いが家に入らないように結界を張る意味があります。「しめ飾り」にはしめ縄に縁起の良い品々

で華やかに飾りつけた「玉飾り」やシンプルな「輪飾り」などがあります。

○扇（おうぎ）…末広がりの繁栄を願う

○橙（だいだい）…代々繁栄するように

○昆布…よろこんぶ

○伊勢海老…長寿の願い

○裏白うらしろ…後ろめたいこと無きように（裏も表も

潔白）

○ゆずり葉…新芽がでて元の葉が落ちずに新

芽が育つてから葉を落とすことか

ら、親が子の成長を見守れるよう

にとの願い

他にも紅白みずひきの水引や御幣ごへいを飾りお祝いを表し

ます。

○鏡餅…家にお招きした年神さまは『御魂』（一

年分の生きる力）を与えて下さるとい

われます。その年神さまの依り代よりしろ

が鏡餅

そしてこの鏡餅を食べることで更に力を頂くのだと言われます。しめ飾りと同じように縁起がよいもので飾り付けをしますが、その飾り方は地域によってもだいぶ異なるようです。

干し柿を串に刺したものを飾っている鏡餅をみたことはありませんか？ 柿は「嘉来」に通じる縁起ものといわれます（「嘉」はめでたさや素晴らしさを意味し、それが来る）。串に刺した串柿は剣を表し、「鏡〓鏡餅、玉〓橙、剣〓串柿」で「三種の神器」を表していると言われます。

また家長が家族に年神さまの力の宿った餅を配ることが『お年玉（魂）』の由来ともいわれています。いつの間にかお餅が金品に代わったようですが、お年玉はもらっても、あげても嬉しいものですよね。

お年玉をもらって子供たちは喜び、その喜ぶ姿をみてあげた大人も喜べます。慣習や義務感

のようなものでなく純粹に喜ぶ顔が見たいから行う行為。お年玉だけでなく、他人に何かを与えることで、相手が喜ぶ姿に共に喜べる心。与える喜びを感じることが出来たらいいですね。なにも金品でなくても相手の事を思いやつてかける言葉や笑顔だけでも周りの人はきつと喜んでくれますよ。笑顔の連鎖、喜びが喜びを運んでくるそんな一年になりますように。

### ◇やすらぎ寺子屋

善光寺墓苑・横浜やすらぎの郷霊園（横浜市旭区）では、気軽に坐禅体験をしてもらおうと、毎月第三日曜日午後二時より約一時間「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

ここでの坐禅は椅子坐禅なので、初めての方や、ひざの痛みや疲れが心配な方も安心です。法話会と茶話会もあるので充実の時間を過ごせます。心を静めて、仏教体験をしてみませんか。



## ◇たくわん作り

霊園の空いた緑地で菜園を行っています。今年はそので出来た大根で「たくわん」を作りました。土作りをして種を蒔き、芽が出て育ち始めたところで台風に遭い、それでも大きく育って収穫。洗って干して漬けてと大変な作業でしたが、人に聞いたり調べたりして何とか完成。善光寺の早朝坐禅でお粥と一緒に召し上がってもらいました。



## ◇亡き方へのお手紙

昨年募集致しました亡き方へのお手紙、多くの反響を頂きました。

亡くなったご両親に対し、親の年齢になってやっとあの頃の親の想いが理解できるようになったことを反省も込めて綴られた手紙や、若い頃に寮生活でお世話になった方を思い出してのお手紙等。亡き方に届きますようご供養申し上げます。

## ◇合同合祀慰霊祭

四月十六日、桜の花が舞い散る快晴の中、合同合祀慰霊祭が執り行われました。

今年は六十名を超すご縁の皆さま方がご参加、ご焼香されました。

合同合祀慰霊祭とは一年に一度「永代供養墓善光寺やすらぎの碑」より「やすらぎの塔」へ

御霊を移し合祀する慰霊祭です。最近はお墓に  
対する考え方の多様性から永代供養墓へのニー  
ズが増えてきています。慰霊祭に参加された  
方々からは「これで安心しました」との感想を  
頂戴しますが、合祀したらそれで終わりではな  
く、折に触れ「やすらぎの塔」へ墓参されてい  
る姿を拝見致しますと永代供養墓の必要性を感  
じます。

### 《アートフラワー》

季節ごとに管理事務所内を彩る素敵なお花を  
持つてきてくれる臼井さん。本物とみまちがい  
ますね。白  
い梅の花か  
らは香りも  
漂ってきそ  
うです。



クレマチス



白梅と椿

## ◇善光寺永代供養墓◇

～やすらぎの碑・やすらぎの塔～

1、合葬 ※やすらぎの碑に埋葬。

単独型 永代供養料 五〇万円

夫婦型 永代供養料 八〇万円

三十二年間骨壺にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

2、合祀 ※やすらぎの碑に埋葬。

一 霊 永代供養料 三〇万円

十年間骨壺にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

3、合祀2 ※やすらぎの塔に直接合祀。

一 霊 永代供養料 二〇万円

合同合祀供養祭にて合祀

○ご希望の方には石版に一名づつ墓誌を彫刻致します。  
(有料・三万円)

○他霊園からの改葬など複数名の契約(三霊以上)については金額のご相談も承ります。

○生前申込も受け付けております。

○詳細はやすらぎの郷霊園管理事務所までお問い合わせください。



合同合祀慰霊祭

### 〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

### 〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)  
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)  
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)  
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutschland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)  
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の研究機関、仏教関係大学及び寺院

### 〔派遣期間〕

令和3年4月より1年間

### 〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する  
必要経費並びにその往復旅費

### 〔募集人数〕

令和3年度若干名

### 〔提出書類〕

1. 日本語の論文(次の論題より、いずれか一題選択)
    - ①これからの国際交流と仏教の役割
    - ②世界平和と仏教徒の誓願
    - ③留学僧として私はこれを学びたい
    - ④異文化の中で仏教を学ぶ  
A4判 2,000字以上(原稿用紙5枚以上)
  2. 保証人と連署した願書
  3. 卒業証明書
  4. 履歴書
  5. 推薦書
  6. 健康診断書
- 令和2年12月10日、事務局必着のこと

### 〔発表〕

令和3年1月10日、本人に通知する

### 横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号  
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

# 第 34 回 生

# 横浜 善光寺 留学僧募集

令和 3 年度・2021

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の  
規程ならびに細則をごらんください。



**ZENKŌJI**  
**YOKOHAMA**

## 毎月の催事

### 坐禅会

善光寺では、様々な坐禅会を行っています。

『早朝参禅会』では、坐禅の後に朝食も頂きます。応量器（おうりょうき）と呼ばれる食器を使い「十仏名」や「五観の偈」などをお唱えして作法に沿って頂くお粥の味は格別です。

『日曜坐禅会』では、坐禅の後に水庭浩章老師による「正法眼蔵 現成公案」の提唱があります。難解で敬遠されがちな正法眼蔵も、水庭老師が丁寧にお話して下さることで理解が深まります。

平日の「朝いち禅」は、特別なことではなく坐禅に親しむ時間です。朝に坐禅する習慣を持つことで一日を有意義に過ごしましょう。

皆さま、それぞれご自分にあつた坐禅会へのご参加を是非お待ちしております。



## 2020年 坐禅会年間予定

### ■早朝参禅会 毎月第1日曜日 朝6時から

1月5日(日)	7月5日(日)	午前 5:45 集合 6:00～ 坐禅・読経 7:30～ 朝食(お粥) 8:15 解散
※2月9日(日)	8月2日(日)	
3月1日(日)	9月6日(日)	
4月5日(日)	10月4日(日)	
5月3日(日)	11月1日(日)	
6月7日(日)	12月6日(日)	

早朝参禅会参加ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

※2月は第2日曜日となります。

### ■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後2時から

1月26日(日)	7月26日(日)	午後 2:00～ 準備・指導 2:20～ 坐禅 3:00～ 提唱 4:00頃 閉会
2月23日(日)	8月23日(日)	
3月22日(日)	9月27日(日)	
4月26日(日)	10月25日(日)	
5月24日(日)	11月22日(日)	
6月28日(日)	12月27日(日)	

提唱は水庭浩章老師(山梨県長泉寺住職)による『正法眼蔵 現成公案』

参禅ご希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

■朝いち禅 毎週月曜日～金曜日 午前6時30分から7時30分迄、坐禅と読経  
禅寺の朝は、坐禅と読経から始まります。「朝いち禅」はお坊さんと共に勤める朝一番の修行です。

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。

服装はゆったりとしたもの。靴下は履きません。

時計やアクセサリーは、はずして下さい。

参加費はすべて無料です。

# 写経会

写経は仏教経典を書写することです。

自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の供養、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。上手い下手は関係なく、お経を一文一文字、心をこめて書き写す中で、自己と見つめ合い本来の姿に気づいていくことが写経の最大の功德です。心を調べ、ともに写経してみませんか？

【日時】 毎月第四金曜日

午後二時より一時間半

【場所】 善光寺不動殿

【指導】 永島南翠先生

## 2020年 写経会年間予定

1月24日（金）	7月24日（金）
2月28日（金）	8月28日（金）
3月27日（金）	9月25日（金）
4月24日（金）	10月23日（金）
5月22日（金）	11月27日（金）
6月はお休みです。	12月25日（金）
午後 2：00～ 読経「般若心経」 2：10～ 写経 3：00～ 読経 3：30 解散	

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加ご希望の方は準備の都合上、ご連絡下さい。当日でも結構です。



## 論語からのお話

善光寺では生き方のヒント、論語の教室を開催しております。

難しいと敬遠されがちな論語ですが講師である東郷先生の巧みな話術でアツと言う間に時間が過ぎてしまいます。先生ご自身が論語を学び始めてから人生が変わられたお話を面白おかしく語られます。参加された皆さまも「東郷先生のお話が面白くて毎月楽しみに来ています」と笑顔、笑顔。

笑い溢れる中でも「他」と過去は変えられない。変えられるのは自分と未来だけです」とドキリと考えさせられるひと言。論語を学び生活全般にその姿勢を活かし実践していくことで、人生が変わる。皆様、一緒に論語を学んでみませんか？



## 2020年 論語講座年間予定

「論語」からのお話

講師：東郷 敏先生

1月12日（日）	※7月5日（日）	毎月第2日曜日 午後2時半～3時半
※2月8日（土）	8月はお休み	
3月8日（日）	9月13日（日）	
4月12日（日）	10月11日（日）	
5月10日（日）	11月はお休み	
6月14日（日）	12月13日（日）	

※2月は土曜開催です。

※7月は第1日曜です。

参加費は無料です。聴講ご希望の方はご連絡下さい。

## 書道教室

書は十人いたら十通りの書き方があります。とても丁寧に書く人や、走り書きでせっかちな字など、その人の個性が溢れ出るものです。しかし、その個性を受け入れられず、字に対して劣等感を抱いている方も少なくないでしょう。善光寺では仏様に見守られている本堂にて書道教室を開催しています。仏様の前では、誰もが互いを否定することなく、わけ隔てのない心となります。初心者の方も経験者の方も、大人も子どももみんな一緒になり、仏様とともにお互いの垣根をこえて書に向き合えるのはお寺ならではの魅力です。一度、お寺の書道教室に来てみませんか？

毎月第1・第3土曜日 午後1時～3時  
【参加費無料】（お手本代 ¥480/月）  
指導・吉田翠華先生  
※参加ご希望の方は、ご連絡ください。



## ご詠歌教室

梅花流御詠歌とは、お釈迦さまや祖師方を讃え、ご先祖さまを敬うところを旋律にのせてお唱えするものです。最初に発声した人の音程に合わせてお唱えいたします。一人がみんなに、みんなが一人に合わせることで成り立つのが御詠歌の持つ良さです。そこには上手いも下手もありません。ご指導して下さる渡邊清徳先生のお唱えは、それだけで心救われ、歌とともにみ教えが体に染み込んでゆくようです。

善光寺御詠歌教室では、いきなり法具を持つことはせず、お唱えを中心に、その中に込められたみ教えとともに、先生が優しく教えて下さいます。ただひたすらに仏様の教えを歌に乗せてお唱えする。支え合いながら一つになる。御詠歌の素晴らしさを一緒に味わいましょう。

### 2020年 ご詠歌教室予定

1月20日 (月)	午後2時から4時迄
2月17日 (月)	午後2時から4時迄
3月16日 (月)	午後2時から4時迄
4月9日 (木)	午後2時から4時迄
5月14日 (木)	午後2時から4時迄
6月11日 (木)	午後2時から4時迄
7月2日 (木)	午後2時から4時迄



ばいかん



ばいかん

【講師】 栃木県高徳寺副住職 渡邊清徳老師  
 ※参加・体験ご希望の方は一週間前迄にご連絡下さい。

## 華道教室

華道と禪の修行はとても似ています。心を調え、花の命と向かい合うことで、そのものものつ本来の美しさが導き出されるのです。作品は自らの心の現れ。心がざわつけば花も乱れ、欲望に満ちていれば五月蠅いものとなります。逆に、心が調っていれば花の良さを活かした作品となっていく。花と向かい合うことで自分を知ることができなのです。花材は、毎回、先生自ら市場に足を運び、選定し、その季節の良さを盛り込んだ新鮮なものを揃えて下さいます。生けた花材は、家に持ち帰ってご自宅で生けることも可能です。指導していただく先生は、様々な賞連続受賞歴を持つ、池坊正教授一級師範、本多輝隆先生です。経験豊富で知識も多く、花

にまつわる風習や、花言葉など、様々な角度から生花を捉え、楽しみながら華道を教えて下さいます。華道教室に参加して、自らの人生に華を添えてみませんか？

毎月第1・第3火曜日 午後2時～3時

### 【参加費無料】

お花代として、毎回千円（花材によっては一五〇〇円）ご準備ください。

指導…本多輝隆先生

池坊正教授一級師範

華道教室「花塾」（港南区丸山台）

※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。



ご詠歌教室



華道教室

お申し込み・お問い合わせ先  
善光寺 横浜市港南区日野中央一―十二―一九  
(二二三四―〇〇五三)  
電話：〇四五―八四五―一三七一  
FAX：〇四五―八四六―二〇〇〇  
Eメール：info@zenkouji.net  
URL：http://zenkouji.net



写経会

# やすらぎ寺子屋

～ほとけの教えに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、毎月「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

お釈迦さまや祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始めたものです。約一時間の内、前半は椅子坐禅、後半は法話。その後、茶話会となります。お気軽にお問い合わせ下さい。

毎月第三日曜日 午後2時～3時

場所：横浜やすらぎの郷霊園管理事務所二階

横浜市旭区上川井町1749-1

電話045-924-0210 FAX045-924-0239

Eメール info@y-yasuraginosato.jp

URL y-yasuraginosato.jp

参加費は無料です。

## 2020年 やすらぎ寺子屋年間予定

1月19日（日）	7月19日（日）
2月16日（日）	8月16日（日）
3月15日（日）	9月20日（日）
4月19日（日）	10月18日（日）
5月17日（日）	11月15日（日）
6月21日（日）	12月20日（日）



育英会寄付者

■平成三十年十二月〜令和元年九月

港北区	瀧澤	武雄殿	港南区	佐藤和彦殿
港南区	南	有里殿	高槻市	東郷敏殿
港南区	森	ふじ子殿	港南区	日野石材工業協同組合殿
港北区	金永みつ殿		台東区	翠雲堂山口肇殿
磯子区	越石重博殿		港南区	(株)せんざん山泉篤殿
港南区	増山静江殿		緑区	豊島節夫殿
港南区	貞昌院殿		町田市	鈴木幸雄殿
平塚市	山口義男殿		新宿区	東亜建設工業(株)殿
都筑区	阿部匡宏殿		港北区	東野光生弟子受賞者一同殿
柏市	伏見邦弘殿		都筑区	唐戸清子殿
港南区	鳥居石材店殿		港南区	千葉佳子殿
			戸塚区	富士哲也殿
			保土ヶ谷区	菱沼和子殿
			西多摩郡	宮田林産(株)
			宮田	雅雄殿



港南区	池田耕三殿	富山県	浅香恵殿	茨城県	植芝弘子殿	港南区	桂川正克殿	小諸市	正眼院内山款偉殿	栄区	野辺義文殿	江東区	西谷榮殿	旭区	半澤範之殿	小田原市	萬松院安藤道隆殿	港南区	伊藤興郎殿	川崎市	宮田富夫殿
-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	----------	----	-------	-----	------	----	-------	------	----------	-----	-------	-----	-------

ありがたいご寄付を賜り、

心より厚く御礼申し上げます。



ドイツ普門寺・中川正壽老師より  
お便りを頂戴しました。

善光寺尊董

黒田博志理事長

拜復 残暑厳しい折ご健勝を祈念致します。

過日は貴寺育英会の資料一式をご送付いただきありがとうございます。毎度拙寺の図書館に張り出しておりますが、いまだ応募者のないのは残念なことです。やはり日本語習得が大きな壁になっているようです。

とはいえ貴育英会卒業生の面々は壮観たる数と人材であります。継続のご精進に感服いたします。

当センターはそれなりに定着してまいりました。

たが、禅道場としては出家の人材が現れず、これも時勢であるかとわが身の年齢を省みたりしますが、やはりなんといつても自らの力量不足に思い当たるこのごろであります。昨今の拙詠を添付いたします。

合掌

二〇一九年八月三十日

ドイツ普門寺 中川正壽 九拝

二〇一九年令和元年夏の日に

さすたけの君よやすらに

み佛の慈悲に洩れたる人のなければ

佛とは君を育むいのちにて

君を抱き取り休む暇なし

南無と受け 身をあげければ

いまの世に 君あり吾あり佛あり

いだかれてあづけわたしして生くる身に

尊きものはいまの息

この息も止まれば易しこの身をば

佛のみにゆだね返さん

生涯の君の精進報われん

佛は嘉(よみ)す君の越し方

涙もて乗り越え来る幾千の

うつしこの世の愁悲憂苦惱

うつし身に受くるこの世の苦しきは

われを導き此処に至れり

泣き叫ぶ君はわれなり

苦しまん君はわれなり かの日かの時

地獄なるこの世にありて ひと日ごと

君を癒さん 佛の祈り

まづ君を度(わた)さんとてか歩まれし

佛の願ひ いまは全し

ひさかたのけふの夏日に祈ること

君に幸あれ なごみやすらへ



# 読者のたより

昨十月にネパール巡礼

大乘寺山主 東隆眞老師  
石川県

年の瀬を前に『成寿』第

四十八号拝受いたしました。

ありがとうございます。御礼申し上げます。

今秋十月中旬十四名の同志とネパール佛蹟巡礼にまいりました。ネパール巡礼は二度目です。たいへんありがたううれしいことでした。

皆さまの御健勝をお祈りいたします。母上様によりしくお伝えください。

不二

教学の糧と

清水寺貫主 森清範様  
京都市

謹啓 貴下益々御清祥の段大慶に存じ上げます。

平素は当山に対し格別のご懇情を頂き、尚その上此度は『成寿』第四十八巻を御恵贈下さり、誠に有り難うございます。当山の貴重な蔵書として納め、教学の糧とさせて頂きたく、寸書をもって御礼申し上げます

合掌

## 内容豊富な『成寿』

神奈川県

宮本延雄先生

謹啓 光陰矢の如し…お彼岸の季節になりました。

昨年の暮れに善光寺様の季刊誌、内容豊富な『成寿』第四十八号御恵贈賜っておりましたのに、手違いで御礼が年を越しましたことまことに申し訳なく深くお詫び申し上げます。

山内御一統様ご自愛專一を御祈念申し上げます。

合掌

## 平成の最後の師走に

静岡県

少林寺東堂 井上貫道老師

拝復 平成の時代も残り少ない最後の師走、『成寿』第四十八号拝受いたしました。貴寺一年の歩みが行間から読み取れて、ご活躍が目に見えます。

留学僧育英会で育ちご活躍の方々、育ての親も育たれた方もどちらも立派です。

成寿アーカイブ第三十四巻よりのドイツでの講演をおえて〃を拝読して故・武志老師の特別僧堂安居の志が私な

りに少し理解出来た様に思いました。

「修証義」の第十七節よみごたえありますし、説得力、いや、言葉の意味や解釈でなく、本質を伝えることの大切さは同感です。

## 「禅の声」多くの仏縁を

秋田県

松庵寺 渡辺紫山老師

拝復 第四十八号拝読、深謝申しあげます。平成三十年十二月十四日、駒澤大学記念講堂に於いて「禅の声」を催しました。秋田から烏合衆の一員として参加したのです

が、梅花流特派師範の渡邊清徳老師と同じ舞台に「心のハーモニ」成功することが出来ました。

なんと、光真寺様とのご縁を知り、ありがたいことでした。また、須坂の興國寺の現住水野老師は、私の高校吹奏楽班の先輩で大変お世話になりました。

合掌

「今、ここ」の積み重ね

大圓寺 石黒玄章老師

長野県

年の瀬を迎え御多忙の事と拝察いたします。この度も『成

寿』をご恵送頂き厚く御礼申し上げます。毎号楽しみにしております。

博志住職が巻頭言でお示しの「今、ここ」の積み重ねで今がある。巻頭の集合写真で、ご家族はじめ山内の皆さまの「今、ここ」のご活躍のお姿が現れているように思いました。今後先代方丈さまのご意思を受け継ぎ来年の五十周年、未来永劫の山門繁栄をご祈念申し上げます。

頓首

博志さま

いつもありがとうございます。『成寿』ありがとうございます。

います。早速拝読させていただきます。些少ですが育英会にお役立て下さい。会える日を楽しみにしています。良いお年をお迎えください。

善光寺の発展を象徴

神奈川県  
佐々木宏幹様

『成寿』二〇一八年冬号(第四十八巻)を拝受いたしました。育英会第三十一回辞令交付式の記念写真を目にし、貴師の隣に筆頭総代の熊谷豊太郎氏のお姿を見て大変悦ばしく感じました。たしか百歳を超えて三年程になられます

ね。何度かお話を伺ったこと  
があります。人物の大きさ  
からくる安心感を覚えたもの  
でした。善光寺の発展を象徴  
しているように感じたもので  
した。

「ニューズアラカルト」は  
善光寺の多様多彩な活動を示  
しており感銘を受けました。  
ますますの御発展を祈念いた  
します。

母上様よろしく申し上げ  
て下さい。

合掌

### 人のためになるお寺

愚閑禅道場 瀬戸川勝裕様  
神奈川県

謹啓 『成寿』有り難うござ  
いました。平成十三年から  
故・武志老師にお世話になり  
感無量の思いをいたしており  
ます。博志様も父上の意志を  
継ぎ立派に成長されているの  
をさすがと思っております。  
今後とも前平師と共に善光寺  
様のご隆盛に尽くされ人のた  
めになるお寺としての存在を  
期待しております。

坐禅は続けております！

合掌

### 恩師・三喜庵先生の作品

千葉県  
藤田正子様

平成最後の年もあと数日で  
終わりを告げようとしていま  
す。私にとってもこの三十年  
の間は自分なりに実に色々な  
事がギッシリとつまった年月  
でした。

『成寿』が届き、袋を開く  
といつもの様に美しくなつか  
しい私の絵の師である伊藤三  
喜庵先生の作品があらわれま  
す。ページを開くと次々とな  
つかしい師の作品が見られま  
す。なつかしく、色々な事ご

とを思い出してしまいました。

今回の黒田住職の巻頭言を拝読し「今」を大切にすると  
という言葉が強く深く心にひびきました。新年もおつしやるように私も置かれた場所です生懸命その時、その時を大切に努力して生きたいと考えました。

ありがとうございました。

先代様の

ドイツの様子

磯村啓子様  
東京都

拝復 『成寿』第四十八号  
御恵送頂き有難うございます。

お話に伺っておりました先

代方丈様のドイツでのご講演  
の様子がよくわかり大変興味深い内容でした。

善光寺様の益々の御隆盛を  
祈念致しております。

武志大和尚様が

みまもって

浅香 恵様  
富山県

前略 ごめん下さいませ

『成寿』第四十八巻を送って  
いただきありがとうございます。  
ます。

博志方丈様は五月にポリ  
プ除去の手術を受けられたと  
か、大丈夫ですか？ 大変で

したね。私は乳がんの手術よ

り五年八ヶ月をむかえます。

おかげさまで元気にしており  
ます。武志大和尚様がみまも  
つていて下さるような気がい  
たします。

御縁の不思議さ、ありがた  
さに感謝の心でいっぱいで  
す。これからもよろしく御指  
導下さいませ。

かしこ

毎月日本とタイを往復

井筒屋代表 榎森正浩様  
山形県

拝復 『成寿』第四十八巻  
を頂き誠に有り難うございま



した。

小生、今も毎月日本とタイを往復しております。そして日本の地位が低下しているのを肌で感じております。時折、海外での仏教大会にも参加しますが、日本の存在感が年々小さくなってきている様に思われます。

このような時期でも育英会事業を堅持されている善光寺様の存在に大いに勇気づけられますとともに、先住様が崇高な志で始められたこの仏教活動の偉大さ、正しさをひしひしと感じ入っております。善光寺様、育英会様の益々の御隆盛を祈念申し上げます。

す。

### 住職様の法話に

胸が熱く

神奈川県

佐川春枝様

九拝

前略 『成寿』第四十八巻の住職・黒田博志様のご法話、施食法要の「ご縁に支えられて」を読ませていただきました。

声帯にポリープができたとの事、そして手術された事、今日十二月二十八日に初めて知りました。一人の檀家さんのお言葉で癒されてお元氣になられた事、胸が熱くなりま

した。

先日、納骨の件でお会いした時は何も知らず何のねぎらいの言葉もかけずに失礼しました。あの時はだいぶお元氣な様子でしたので今は私も胸をなでおろしています。

どうぞよいお年を 早々

### ケセラセラの越年

神奈川県

佐藤康雄様

初枝様

今年もいよいよ押し迫りました

各地の素晴らしい紅葉景色も見納めでは……

毎年の如く暮れの片づけも  
思っているだけでは進まず見  
て見ぬ振り ケセラセラの越  
年となるでしょう 子供の頃  
には待ちに待ったお正月も高  
齢になった今煩わしさが先に  
たちます

今年の一字「災」転じて「福」  
となる穏やかな年となります  
よう念じています

向寒の折皆さまどうぞ体調  
にご留意くださいませ

十二月二十八日写経日より  
しくお願いいたします

★写経会の参加連絡をハガ  
キで毎月送ってくださいま  
す。





## 編集後記

○成寿四十九巻お届け致します。

○昨年善光寺は開創五十年を迎え、十一月二十八日に記念式典を行うことが出来ました。これもご縁を賜りお支え頂いた多くの皆様のおかげと心より御礼申し上げます。今巻はその記念式典を特集するため春季号でのお届けとなりました。

○記念式典では世界遺産京都清水寺ご住職森清範貫主による記念法話。毎年暮れに話題となる「今年の漢字®」を清水の舞台で大きく揮毫されているあのご住職です。漢字をはじめとする文字、言葉について深い造詣の一端をご披露頂きました。『言葉(ことたま)』といい、言葉には魂が宿る。だからこそ日頃から良い言葉を用いることの大切さを学びました。ユーモア溢れるお話でアツという間の一時間でした。貫主様曰く「皆さんの法を聞く姿勢が素晴らしく時間をオーバーしてしまいました」

た」。説く者も説かれる者も共に聞法の悦びを味わえました。

○五十年、半世紀です。時の長さを感じます。移りゆく時の流れ、時代の波の中で変わららずに善光寺をお支え頂いている皆様と共に慶びを分かち合うことが出来ました。報恩諷經導師をお務め頂いた新美方丈様。本寺様はじめご随喜賜りました御寺院様。遠方より足をお運び下さいました開基家ナリス化粧品社長村岡弘義様。地元日野石材工業協同組合の皆様。総代、世話人の皆様はじめ多くの檀信徒の皆様方。設営等ご尽力頂いた(株)板橋様。当日はお越し頂けず目に見えない形でもご支援くださった多くの皆様。その他全てのご縁に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。式典には先代方丈様も映像で参加。笑顔でご挨拶をして下さいました。更に五十年、百年と皆様に喜ばれるお寺を目指して歩んで参ります。

○昨年はラグビーのワールドカップで日本中が盛り上がりました。今年

は東京オリンピックで更に盛り上がることでしよう。平和の祭典を楽しめる日常に感謝。

○お寺では一斉のご法要の他にも毎月の催事、旅行会や青年会など様々な活動を行っております。どうぞ思い切って足をお運び頂き、仏さまのご縁を結んで下さい。お待ちしております。

○平成から令和へと時代が移っても善光寺は『ONE TEAM』でこれからも精進して参ります。ご指導、ご支援の程何卒宜しくお願い申し上げます。

成寿 第四十九巻

令和二年二月十五日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話〇四五(八四五)一三七一

FAX〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社





横濱善光寺